保存用1

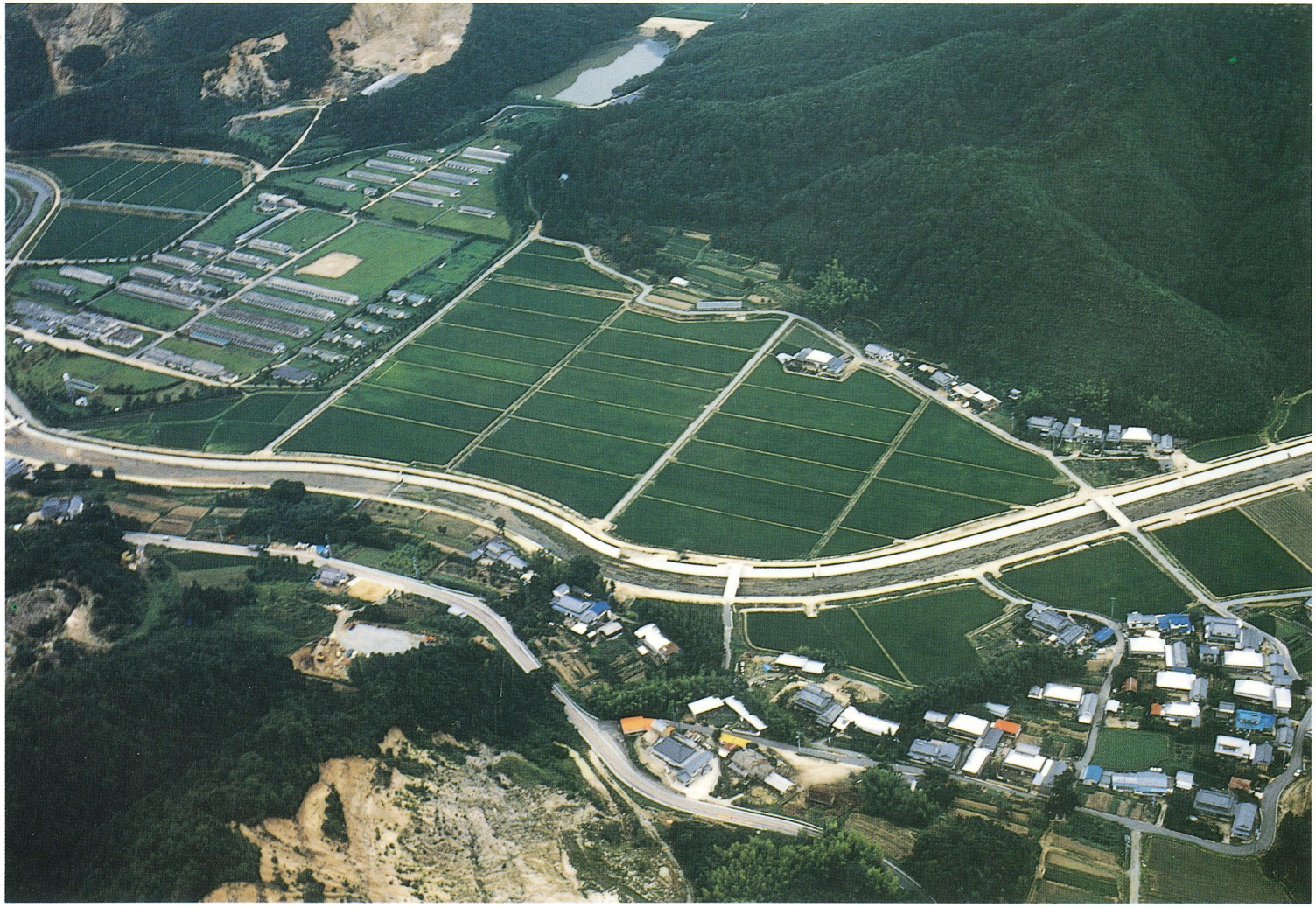
御津町埋蔵文化財発掘調査報告 4

伊田沖遺跡

1988年3月

御津町教育委員会

岡山県御津町教育委員会



巻頭カラー図版　伊田沖遺跡調査・圃場整備完了後全景（南東上空から）

序

伊田沖遺跡は、東から西へ蛇行して旭川本流に注ぐ小支流・新庄川流域の小沖積地の山裾一帯で、谷底平地は、その出入り口がかなり狭く、平野面と山地との接線は凹凸に富み、それぞれがまとまりをもった小集落を営んだものと思われる。

今回、岡山県養鶏試験場の東側は県営圃場整備事業（一工区・約20ha）西側は、土地改良綜合整備事業（下伊田原・約33ha）として実施されますので、御津町教育委員会は、原遺跡と並行して約４カ月間発掘調査をした。

伊田沖遺跡は、新庄川沿いの平野面より北・山麓地で住居址遺溝を中心とした遺跡を多数発掘したことで古墳時代後期の特徴を把握することができた。

原遺跡と同時にこの報告書を発刊いたしましたので、今後この本書が文化財保護と活用のための一助となりますよう祈念いたし序文とさせていただきます。

終りになりましたが、本発掘調査にあたりご協力を賜わった地区は勿論、関係行政機関の方々に対して厚く御礼を申しあげます。

昭和63年３月

御津町教育委員会

教育長　宮　本　久　雄

例　　言

1．本書は、県営圃場整備事業に伴い、御津町教育委員会が昭和61年度国庫補助を受けて実施した「伊田沖（いたおき）遺跡」の発掘調査概要報告書である。

2．遺跡は御津郡御津町大字伊田字沖に所在する。

3．発掘調査は町教育委員会職員二宮治夫が担当し、昭和61年6月2日～9月30日まで実施した。

4．発掘調査にあたっては、岡山県教育委員会、御津町役場農業土木課、地権者等の援助を受けた。特に発掘作業に従事していただいた方々には大変おせわになりました。記して感謝の意を表します。

5．遺物の整理は宇垣コミュニティセンターで二宮が行った。尚、遺物、実測図、写真等は御津町教育委員会において保管している。

6．本書の執筆・編集は二宮が行った。報告書作成にあたっては、岡山県古代吉備文化財センター職員正岡睦夫、森　宏之の協力を得た。

7．本書に使用したレベル高は海抜高であり、方位は第1～4図が真北、他は磁北である。第2図の地形図は建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（金川）を複製したものである。

8．図版中の遺物番号は本文中の遺物番号と同一である。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 5
第３章　伊田沖遺跡の調査 …… 8
　第１節　Ａ地区の調査 …… 8
　第２節　Ｂ地区の調査 …… 13
　第３節　Ｃ地区の調査 …… 20

図　目　次

第１図　位置図（１／1,320,000） …… 1
第２図　伊田沖遺跡周辺遺跡分布図（１／50,000） …… 2
第３図　調査範囲図 …… 6
第４図　整備後の調査範囲図 …… 7
第５図　Ａ地区遺構全体図（１／400） …… 8
第６図　Ａ地区合口甕棺墓平・断面図（１／20） …… 9
第７図　Ａ地区合口甕棺 …… 10
第８図　Ａ地区建物平・断面図（１／100） …… 11～12
第９図　Ｂ地区土層断面図（１／100） …… 14
第10図　Ｂ・Ｃ地区遺構配置図（１／500） …… 15～16
第11図　Ｂ地区１号住居址平・断面図（１／80） …… 17
第12図　Ｂ地区１号住居址（11～20）・同付近出土遺物 …… 17
第13図　Ｂ地区２号（左）・３号（右）住居址平・断面図（１／80） …… 18
第14図　Ｂ地区出土遺物 …… 19
第15図　Ｃ地区土層断面図（１／80） …… 20
第16図　Ｂ・Ｃ地区出土遺物 …… 21
第17図　Ｃ地区１号住居址平・断面図（１／80） …… 23
第18図　Ｃ地区１号住居址出土遺物 …… 24
第19図　Ｃ地区１・４・５号住居址出土遺物 …… 25
第20図　Ｃ地区２号住居址平・断面図（１／80） …… 26
第21図　Ｃ地区出土遺物（１／４） …… 27

第22図　C地区３号住居址平・断面図（１／80）…… 28
第23図　C地区３号住居址出土遺物（１／２）…… 29
第24図　C地区４号住居址平・断面図（１／80）…… 29
第25図　C地区５号（上）・６号（下）住居址平・断面図（１／80）…… 30
第26図　B・C地区出土遺物（１／２）…… 31
第27図　B・C地区出土遺物（１／４）…… 32
第28図　C地区小皿納入甕平・断面図（１／10）…… 33
第29図　C地区小皿納入甕出土遺物…… 34
第30図　C地区土壙墓（１／30）…… 35
第31図　C地区出土遺物…… 36

図　版　目　次

図版１　１．伊田沖遺跡全景（南南西から）
　　２．A地区建物・溝状遺構・合口甕棺墓検出状況（東から）
図版２　１．A地区遺構全景（東から）
　　２．A地区建物全景（東から）
図版３　１．A地区合口甕棺検出状況（南から）
　　２．A地区合口甕棺内部掘り上げ状況（南から）
図版４　１．A地区合口甕棺埋納土壙（南から）
　　２．A地区下層遺構全景（東から）
図版５　１．B地区東側全景（西から）
　　２．B地区東側南北土層断面（東から）
図版６　１．B地区１号住居址南北土層断面（西から）
　　２．B地区１号住居址床面遺物検出状況（南から）
図版７　１．B地区１号住居址内出土遺物近影
　　２．B地区１号住居址完掘全景（南から）
図版８　１．B地区中央部柱穴・石積遺構全景（南から）
　　２．B地区西側遺構全景（東から）
図版９　１．B地区２号（左上）・３号（右下）住居址完掘全景（南から）
　　２．C地区東端土器溜り近影（南から）
図版10　１．C地区３号住居址東側出土遺物近影（小皿納入甕）
　　２．C地区１号（上）・２号（下）住居址検出状況（西から）

図版11　1．C地区1号住居址検出状況（西から）
2．C地区1号住居址東西土層断面（西側）（南から）
図版12　1．C地区1号住居址南北土層断面（北側）（東から）
2．C地区1号住居址床面・炭化材・遺物検出状況（南から）
図版13　1．C地区1号住居址内遺物出土状況近影
2．C地区1号住居址北壁・炭化材・遺物出土状況近影
図版14　1．C地区1号住居址炭化材除去後全景（南から）
2．C地区1号住居址完掘全景（南から）
図版15　1．C地区1号住居址北壁検出土壙墓半掘状況（南から）
2．同土壙墓完掘状況（南から）
図版16　1．C地区2号住居址完掘状況（西から）
2．C地区2号住居址出土遺物近影
図版17　1．C地区1号（上）・2号（下）住居址完掘状況（西から）
2．C地区3号(上)住居址・土壙(中)・2号(下)住居址検出・半掘状況(東から)
図版18　1．C地区3号住居址検出状況（東から）
2．C地区3号住居址掘り下げ状況（南西から）
図版19　1．C地区3号住居址完掘状況（南西から）
2．C地区4号住居址検出状況（南東から）
図版20　1．C地区4号住居址炭化材検出状況（南東から）
2．C地区4号住居址完掘状況（西から）
図版21　1．C地区1号（上）・5号（左）・6号（右）住居址完掘状況（南から）
2．C地区住居址完掘後全景（西から）
図版22　出土遺物（1）
図版23　出土遺物（2）
図版24　出土遺物（3）
図版25　出土遺物（4）
図版26　出土遺物（5）
図版27　出土遺物（6）

表　目　次

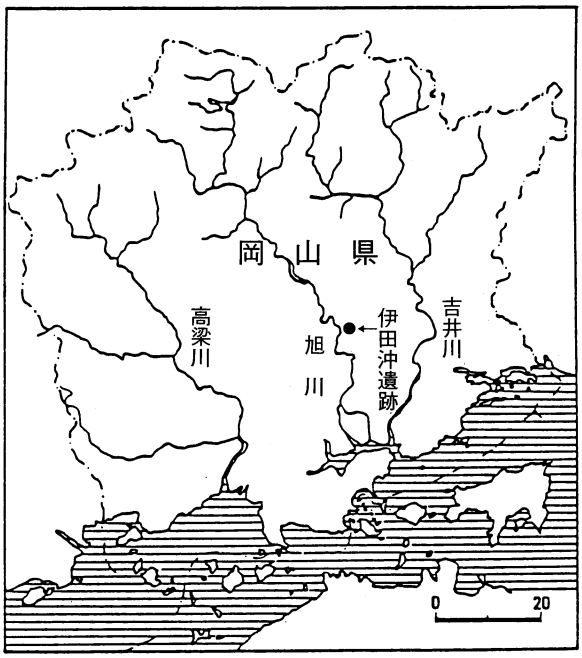
表－1　遺跡一覧表
表－2　伊田沖出土土器観察表

第１章　地理的・歴史的環境

遺跡の所在する御津郡御津町は、岡山県のほぼ中央部からやや南東寄りに位置し、東部は赤磐郡赤坂町・山陽町，西部は御津郡加茂川町・岡山市，南部は岡山市，北部は御津郡建部町・赤磐郡吉井町の一市五町と接している。

面積は約114㎢を有し、町の北西部には標高400ｍ前後の山々が連なるが、他は比較的低平な山地や丘陵が広がっており、全面積の約80％を山地が占めている。

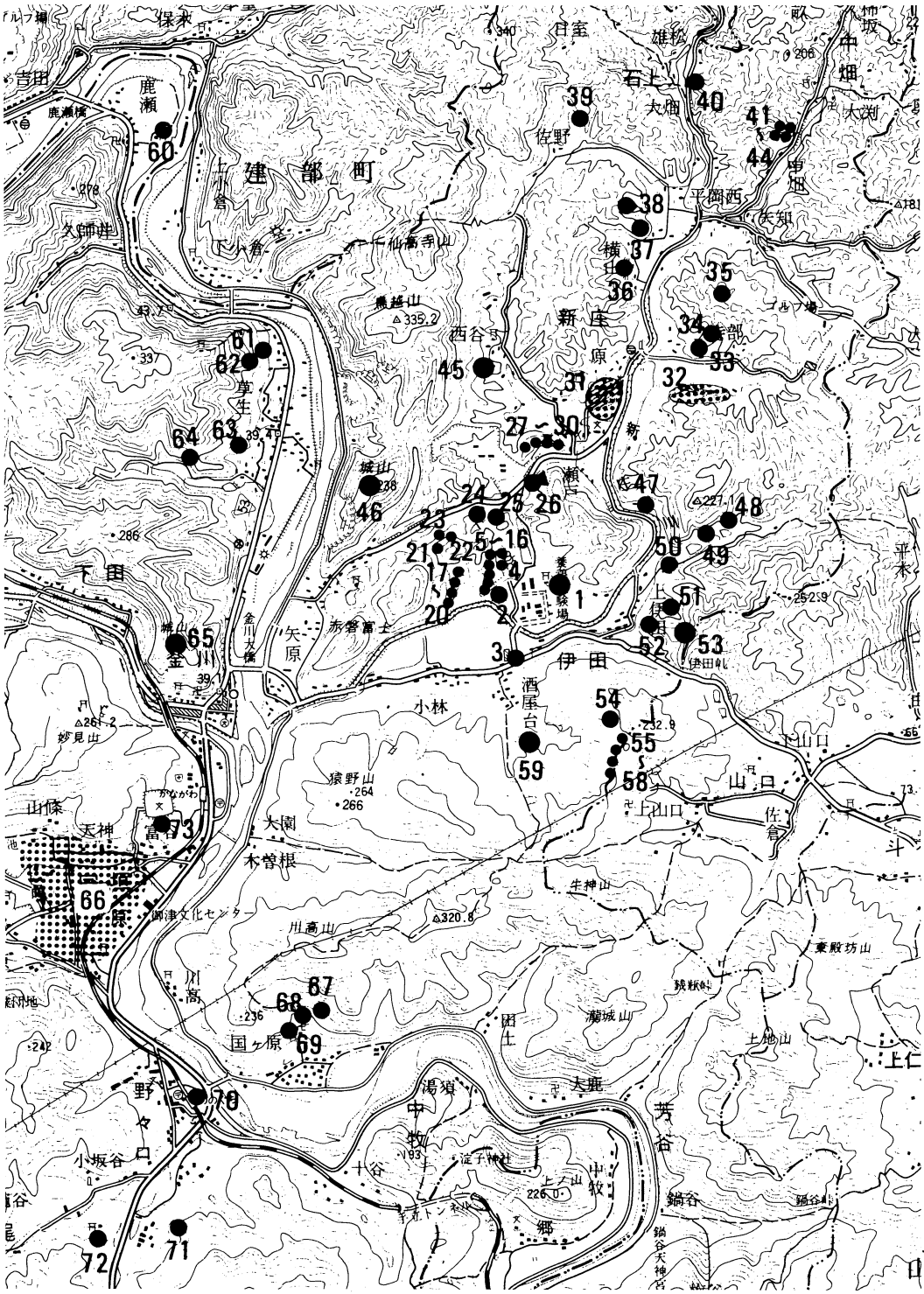
一方、町の東部には岡山県の三大河川のひとつである旭川が、北部と南部で大きく蛇行して町を二分する形で南流し、河川の周辺にはいくつかの氾濫原や沖積地、河岸段丘を形成している。さらには西北部からは宇甘川・北東部からは新庄川がそれぞれの山地の間をぬうような形で流走し、町の中央部で旭川と合流し、周辺に小規模な平野を形成している。このような平野部のなかでは、旭川が町の南で大きく南東に蛇行する西岸部に広がる宇垣地区の平野が最も大きく、次に新庄川流域の伊田および新庄の平野がある。主要な集落は、旭川とその支流とによって形成された氾濫原・沖積地・河岸段丘等の平地部に集中している。



第１図　位置図（１／1,320,000）

伊田沖遺跡は南西に流走する新庄川の右岸に形成された河岸段丘と沖積地上に所在している。

御津町内で現在知られている最も古い遺物（縄文時代後期）を出土している遺跡は今回調査した伊田沖遺跡と伊田岩井山遺跡である。縄文時代晩期にあっては、鹿瀬遺跡・原遺跡・野々口遺跡（後２遺跡は瓦粘土採掘時に発見されている）が知られている。鹿瀬遺跡は町の北端部で旭川が東に蛇行した西岸の段丘上に所在し土器片が出土している。原遺跡は、町のほぼ



第２図　伊田沖遺跡周辺遺跡分布図（１／50,000）

中央で南流する旭川の西岸の沖積地上に所在し、昭和26年頃から瓦粘土を採掘し、土器・石器が出土して注目され、昭和33年、鎌木義昌氏、江坂進氏によって出土した土器に関する共同研究で発表され、縄文時代晩期の「原下層式」設定の契機となった遺跡である。野々口遺跡は、原遺跡の南東約1.5㎞に位置し、粘土採掘中に土器片とともに椎の実、ドングリ、および木の葉などが見つかっている。以上３遺跡はいずれも旭川の西岸に立地し弥生時代の集落址と複合して認められる。

弥生時代の遺跡としては、旭川流域に位置する前述の鹿瀬遺跡、原遺跡、野々口遺跡が縄文時代から引き続き営まれているのに加え、町の北東部を旭川に向って南西に流れ込む新庄川を見下す山麓に中期から後期にかけての遺跡である岩井山遺跡、上伊田遺跡、宅美（たくみ）池遺跡、新庄尾上（おのうえ）遺跡、伊田沖遺跡等が確認されている。岩井山遺跡は昭和50年に発掘調査が実施され、中期後半の竪穴住居址が検出されている。宅美池、新庄尾上、伊田沖の３遺跡は昭和60年度に確認調査が実施されている。弥生時代の遺跡は偶然に土器片等が採集されているものが多く、実態は明らかではないが、未発見の遺跡も含め、各水系を見下ろす丘陵、山裾にも弥生時代の人々が生活を営み始めたことをうかがうことができる。

古墳時代に入ると、各水系を見下す丘陵上には多くの古墳が存在しており、その流域に広がる平野を生活基盤として古墳時代の人々が生活していたことがうかがえる。

古墳の分布状況は、旭川水系約20基、宇甘川水系約20基、新庄川水系約50基が確認されている。このうち旭川流域の草生（くそう）、宇垣、野々口、国ヶ原の平野を基盤とする古墳は後期古墳が主体をなしており、前半期のものはあまり知られていない。それに対して、宇甘川流域では、全長44ｍを測る前方後円墳の菅（すげ）２号墳をはじめ、一辺約10ｍの方墳である菅１号墳や小円墳の中

表１　遺　跡　一　覧　表

1．伊田沖遺跡
2．岩井遺跡
3．酒屋谷遺跡
4～25．岩井山古墳群
26．八ッ塚古墳（前方後円墳）
27～30．天神鼻古墳群（29は前方後円墳）
31．新庄原遺跡　32．新庄尾上遺跡
33．経畔古墳
34．熊野神社古墳
35．天狗古墳
36．鍛冶久古墳
37．八幡神社古墳
38．須道山古墳
39．佐野古墳
40．火の釜古墳
41～44．一本松古墳群
45．西谷城
46．熊谷城
47．瀬戸古墳
48．塚の谷遺跡
49．宅美池遺跡
50．上伊田遺跡
51．宇那山古墳
52．祇園古墳
53．宇那山城
54．しんのう塚古墳
55～58．殿谷古墳群
69．殿谷城
60．鹿瀬遺跡
61．宇条１号墳
62．宇条２号墳
63．平野古墳
64．いかとう古墳
65．玉松城
66．原遺跡
67．香雲寺裏２号墳
68．香雲寺１号墳
69．国ヶ原神社西古墳
70．野々口遺跡
71．虫名古墳
72．恋坂古墳
73．金川古墳

泉2号墳などの前半期の古墳が存在し、引き続き後期古墳が造営されている。さらに最も数の多い新庄川流域においては、流域に広がる平野を見下す丘陵上に、全長約20.5mの天神鼻1号墳、約33mを測る八ッ塚古墳（いずれも前方後円墳）が近接して存在し、周辺にも前半期の古墳が知られている。八ッ塚古墳の南西で伊田の平野を見下す丘陵上に位置する岩井山古墳群の2～8号墳は昭和50年に発掘調査が実施され、箱式石棺や石蓋土壙を内部主体に持った5世紀代の方墳であることが明らかとなっている。このような古墳のあり方からみて古墳時代には新庄川流域は年代的・数量的にも他の水系に比べて卓越している地域であったものと考えられる。

歴史時代に入ると、奈良時代から室町時代の遺跡も原・岩井山遺跡が知られる他、五輪塔、宝篋印塔なども確認されている。特に鎌倉～戦国時代においては、河川および陸上の交通の要衝地にあたることもあって、戦国期では岡山県下最大級の城郭構造をもつ金川（かながわ）城（玉松城）をはじめ、徳倉（とくら）城、虎倉（こくら）城、熊谷（くまだに）城、殿谷（とのたに）城など多くの山城が構築されていた。中でも金川城々主の松田元成は落城まで備前国西半を支配する戦国大名として永く君臨していたところである。

このように御津町は縄文時代から中世に至るまでの遺構・遺物が認められ、大きな歴史の一役を担って来た地域であるといえる。

参考文献

(1) 鎌木義昌・江坂進『岡山県御津町原遺跡―縄文晩期の土器を中心として―』　瀬戸内考古学　第2号　1958年

(2) 神原英朗他『岩井山古墳群』　岡山県御津町教育委員会　1976年

(3) 平井　勝『金川古墳』　岡山県御津町教育委員会　1982年

(4) 『岡山県遺跡地図　第4分冊』　岡山県教育委員会　1976年

(5) 松本和男『原遺跡』　岡山県御津町教育委員会　1983年

(6) 平井泰男『新庄尾上遺跡ほか』　岡山県教育委員会　1986年

(7) 光永真一『西奥遺跡』　岡山県教育委員会　1986年

(8) 御津町史編纂委員会『御津町史』　御津町　1985年

第2章　調査の経緯

調査に至る経緯

御津郡御津町伊田、新庄、石上地区一帯において県営圃場整備が計画されたのに伴い、昭和59年12月7日付けで岡山地方振興局長から文化財保護法第57条3にもとづく協議文書が岡山県教育委員会へ提出された。この中で、県営圃場整備予定地内において周知されている宅美遺跡、新庄尾上遺跡の取り扱いについて、関係機関で協議を行い、これらの遺跡については、(1)工事着手前に確認調査を実施する。(2)調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は別途協議することとなった。この協議結果にもとづき、岡山県教育委員会において、遺跡の保護・保存を講じるための基礎資料を得るために、昭和60年度国庫補助を受けて確認調査が実施された。

本書に報告する御津町伊田字沖に所在する伊田沖遺跡については、宅美池遺跡等の確認調査を実施中に新しく発見された遺跡であり、当該地が圃場整備予定地に位置し、すでに一部で工事が実施されており、緊急に保存協議のための資料を得る必要から、遺跡発見届および事業計画変更承認申請等の手続が行われ、当所計画に加えて調査が行われた。

岡山県教育委員会による伊田沖遺跡の調査結果をもとに、岡山地方振興局、岡山県教育委員会、御津町、御津町教育委員会等で遺跡の保存について協議が行われた。その結果、山裾の斜面の一部は削平しないと水田造成が出来ないため、やむをえず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は御津町教育委員会で担当し、昭和61年度国庫補助を受け、昭和61年6月から同年9月まで行った。報告書の作成は昭和62年度に実施した。

調査体制　　昭和61年度

教育長	宮本久夫	次長	石原洋昭
課長補佐	藤原　正	係長	金光明男
社会教育主事	祐森秀男	社会教育主事（調査担当）	二宮治夫

発掘作業員

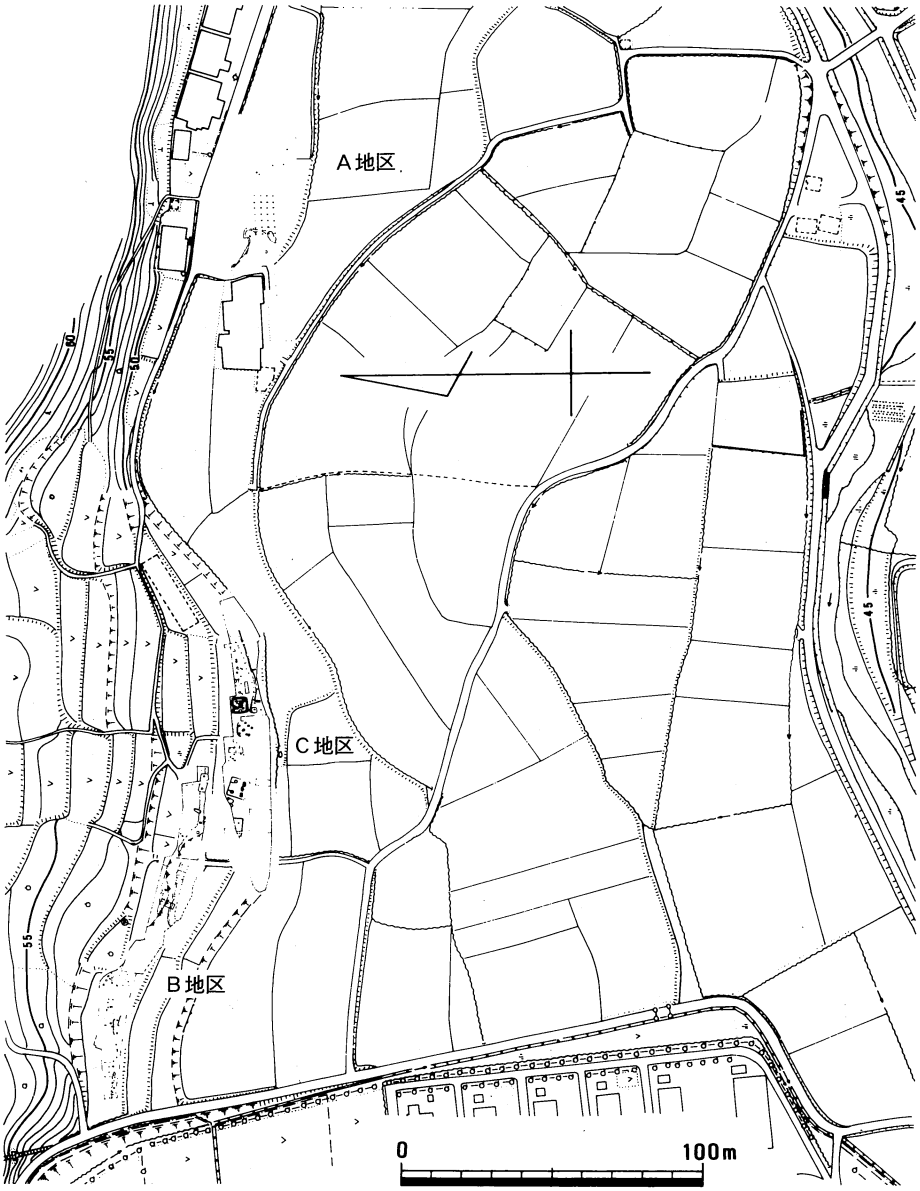
西岡　定勝・西田　一正・舞原　一志・寺門　秀夫・寺門　和寿・吉村　弘・
北山　謙吾・江田　英男・内藤　賢吉・花房　義質・安宗　貞男・内田　亮・
遠藤　笑野・高角　光恵・田口　静子・藤原　絹恵・藤原貴奴江・吉村　芳子・
北山　君恵・寺門　順子・大森　文香・松尾千鶴子

整理作業員

海野ゆかり・春名　年枝

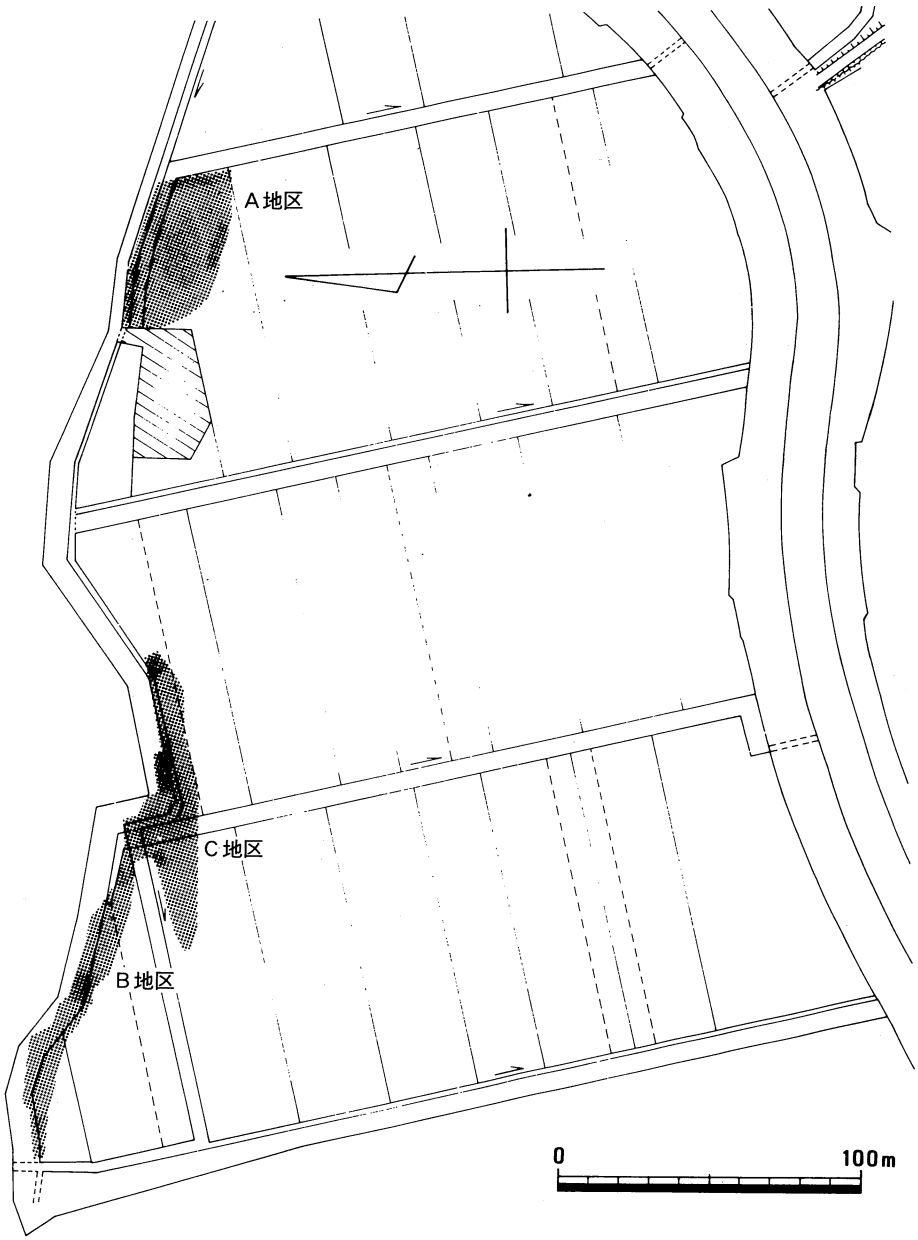
調査区域の設定

伊田沖遺跡のひろがっているところは、北側の山から南の山裾が緩やかに傾斜し、低位部の水田に至る。東寄りの地区では山裾が急傾斜となり、山裾に並ぶ民家の南側に低位部の水田面よりは一段高くなった平坦地がある。この部分が削平されるため、調査対象地とし、A地区とした。A地区の西側には低位部の水田面まで急傾斜になっているところがある。この西側には



第3図　調査範囲図（1／2,500）

山裾が張り出し、緩やかな傾斜となり、現状は段々畑となっていた。低位部の水田に近い部分が削られることになり、最とも南へ突出している部分をC地区、この地区の西側で、少し谷地形を呈する部分をB地区とした。いずれも東西方向に細長い区域を調査した。削平されるところ以外は調査せず、未施工区域と埋土の下になっている。



第4図　整備後の調査範囲図（1／2,500）

第３章　伊田沖遺跡の調査

第１節　Ａ地区の調査

１．Ａ地区の概要

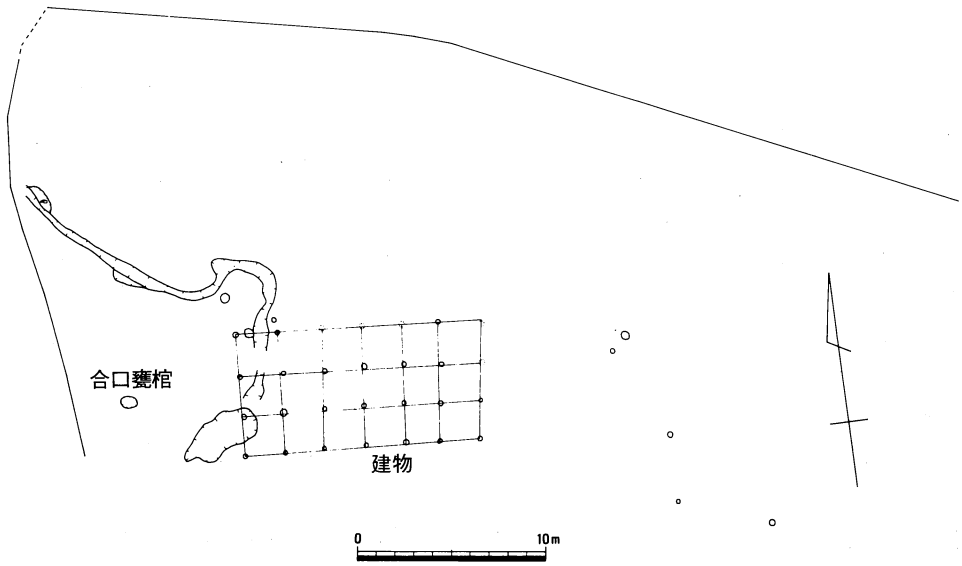
Ａ地区は調査区の東端にあたり、北側の山からのびた山裾に位置し、標高は50m付近である。検出された遺構には、掘立柱建物の１棟、合口甕棺１基、柱穴、溝などがある。

出土遺物には合口甕棺に使用した古墳時代の土師器の甕２個と少量の土器がある。

２．Ａ地区の遺構・遺物

合口甕棺墓（第６・７図、図版３－１、２・４－１）

Ａ地区の西側隅に位置する。墓壙の掘り方は楕円形を呈し、大きさは、長径86㎝、短径62㎝、検出面からの深さ14㎝である。底面は皿状を呈している。長径の方向はほぼ東西を示している。甕棺はほぼ同じ大きさの甕の口縁部を合せて、ほぼ水平にすえている。墓壙の底部からは少し上位にある。検出時の状況では上面が潰れている。内部には土が詰っていたが、内部から遺物は検出されなかった。



第５図　Ａ地区遺構全体図（１／400）

検出された合口甕棺の甕は９・10である。９は西側の甕で、口縁はくの字状に外反し、底部は丸底である。口縁端部は若干肥厚し、角張る。胴部外面には縦位のハケメが施され、内面には縦位のヘラケズリが施されている。大きさは口径29㎝、高さ32㎝、胴部最大径28.4㎝である。

10は東側の甕で、口縁はくの字状に外反し、端部が角張っている。９に比べてややＬ字状に近い。胴部は長くなり、底部付近はややすぼまり、丸底を呈する。大きさは口径28㎝、高さ29.4㎝、胴部径25.8㎝である。

時期は古墳時代後期に比定される。

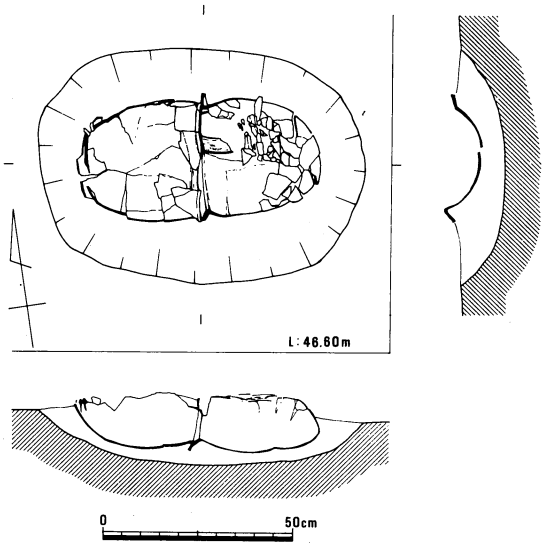
建物（第８図、図版１－２・２－１、２）

Ａ地区の南西部に位置する東西方向の大型掘立柱建物である。桁行６間、梁間３間の総柱建物である。規模は桁行12.8～13.2ｍ、梁間6.1～6.5ｍで、床面積は約456㎡である。桁行の柱間は2.0～2.2ｍである。柱穴の位置は少しずれているものもみられる。柱穴の平面形はすべて円形を呈しているが、径には若干の差がある。大きさは径25～35㎝、深さ20～60㎝である。

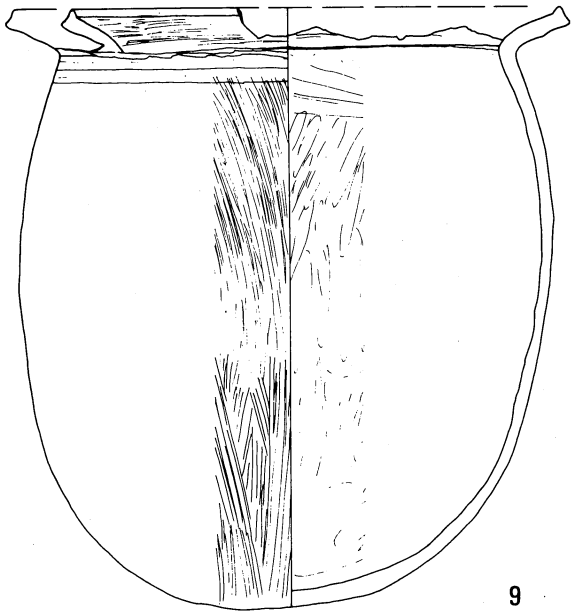
柱穴の埋土中から良好な遺物が出土していないことから時期を明確にすることはできないが、平面形等から中世に属するものと推定される。

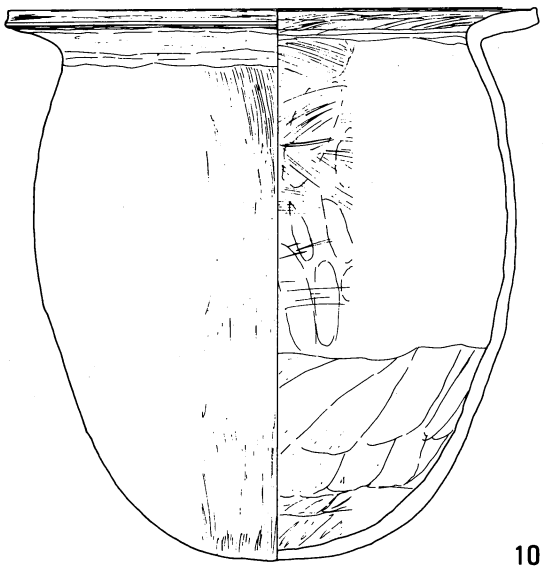
その他の遺構（第５図、図版４－２）

地形は全体に北から南へ緩やかに傾斜しているが、Ａ地区の西寄りは西へ傾斜している。この肩部に沿って浅い溝が蛇行しながらめぐっている。南寄りではとぎれて、大きくて浅い土壙状を呈している。建物の西端部では溝と重複している。埋土中から良好な遺物が出土していないことから時期を明らかにすることはできない。

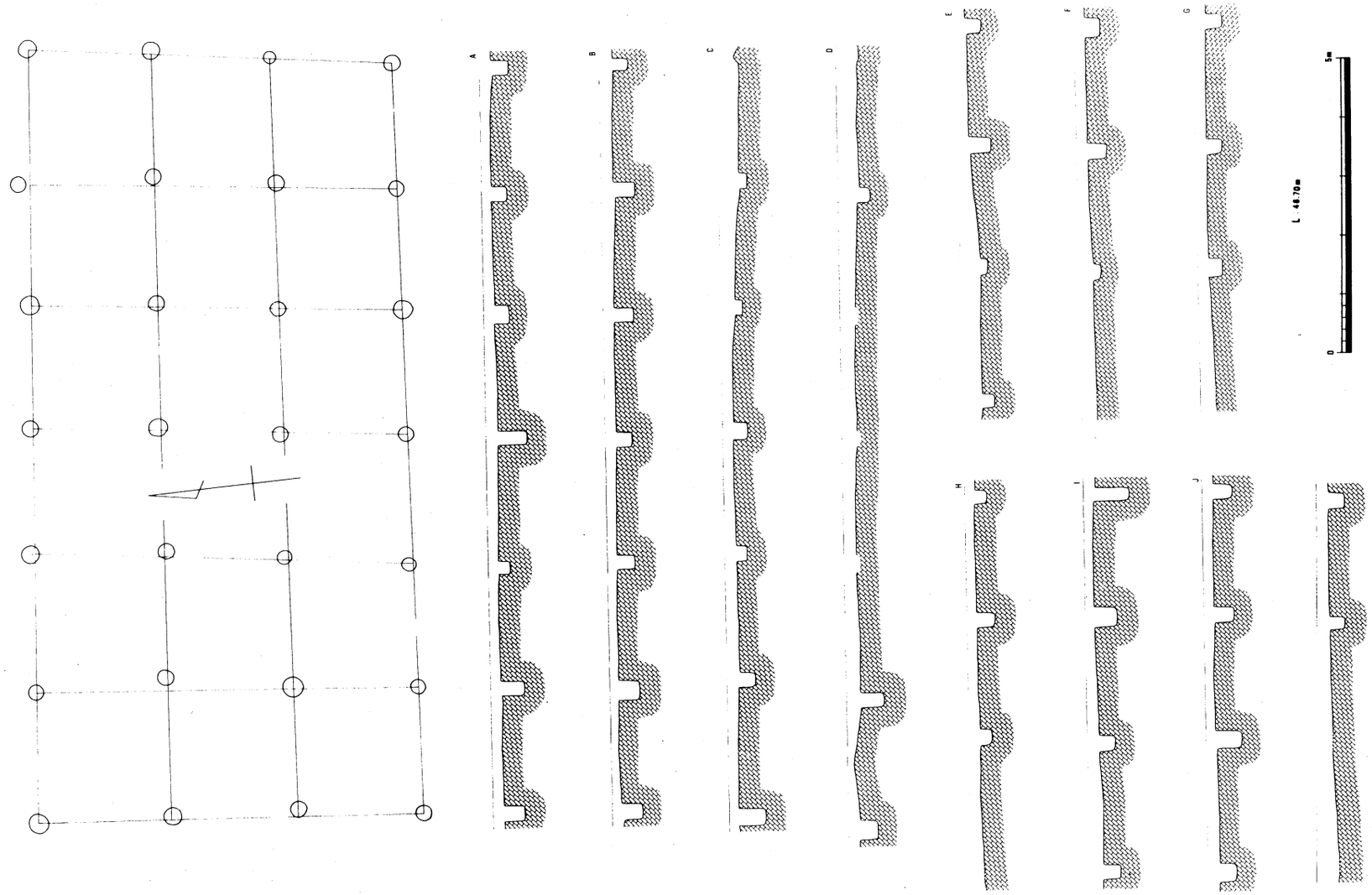


第６図　Ａ地区合口甕棺墓平・断面図（１／20）





第7図　A地区合口甕棺



第８図　Ａ地区建物平・断面図（１／100）

第２節　Ｂ地区の調査

１．Ｂ地区の概要

北側の山から南へのびる山裾部分に位置している。山裾部は少し平坦になり、台地状を呈している。この面から下方の水田まで少し急な傾斜になっている。Ａ地区からは西方へ約200ｍのところである。山裾部の高いところを東西方向に削平されるため、削平する部分だけの調査をしたことから、東西約110ｍ、南北５～７ｍの細長い調査区である。

台地状を呈する部分には弥生時代から中世の遺構・遺物が検出された。主要な遺構は古墳時代の住居址３軒、柱穴群、土壙などである。

２．Ｂ地区の遺構・遺物

(1)　竪穴住居址

１号住居址（第11・12図、図版６－１、２・７－１、２）

Ｂ地区の東端部に位置し、北から南への傾斜面にある。水田造成のため、南側が１ｍあまり切り下げられている。このため住居址の南側が半分以上削り取られている。したがって、住居址の北側の一部を調査したにすぎない。

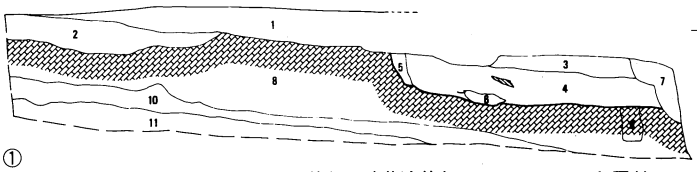
平面形は方形を呈し、北壁はN73°Wを示していて、ほぼ東西方向である。大きさは東西6.08ｍ、南北2.6ｍ以上である。北東隅には明瞭な壁体溝が認められるが西寄りでは不明瞭である。床面では北東と南東隅に近いところに各１本の柱穴が検出された。柱間はＰ１～Ｐ２が4.22ｍである。柱穴は直径46～65㎝、深さ46～64㎝である。Ｐ１付近の床面から須恵器が検出された。

埋土中および床面から検出された遺物は第12図11～20である。11は土師器の甕で、口縁は外湾しながらのびて、端部は丸くなる。内面はヘラケズリが施されている。12は片口の付いた鉢である。13は小型手捏ねの鉢である。14は土師器の杯である。15は須恵器の杯蓋である。16は須恵器の高杯蓋である。上部がくぼんだつまみがついている。17は須恵器の有蓋高杯である。18～20は須恵器の杯身である。

時期は５世紀末頃に比定される。

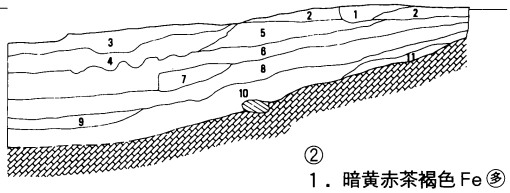
２号住居址（第13図、図版９－１）

Ｂ地区の西端部近くに位置している。傾斜面の肩部に位置し、南側は水田造成のため削られている。このため住居址の北側一部がわずかに残存しているにすぎない。床面もほとんど残っていない。平面形は方形と推定される。北壁はN86°Wを示している。コーナーがわずかに残っているが、東壁と西壁は残っていない。コーナーに近い位置にそれぞれ柱穴が１本ある。この住居址に伴うものと推定される。柱間の距離は4.33ｍである。柱穴の大きさは径45～50㎝、検



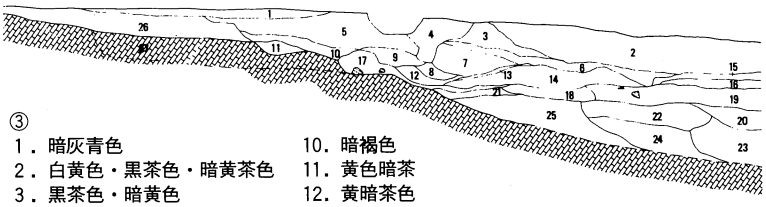
①

1．盛土、宅地の時
2．暗茶黄色
3．暗黄茶色
4．黒茶色・暗黄茶色
5．黒灰茶色・暗黄淡茶色
6．赤茶色(焼土)黒茶色
7．黒茶色(炭を含む)近世攪乱
8．暗黒灰茶色・黄淡茶色
9．5と同じ
10．暗黄暗茶色(砂礫層)
11．淡茶色・暗黄色(砂礫層)
礫→山石(大)



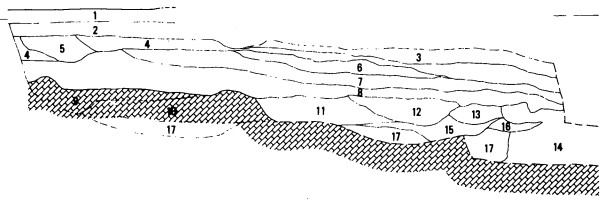
②

1．暗黄赤茶褐色 Fe㊥
2．黒暗茶褐色 FeMn
3．砂礫層
4．暗茶淡黄色
5．黒茶褐色・暗灰黄色
6．黒暗褐色
7．暗茶色・暗灰淡黄色
8．暗黒茶褐色・暗灰淡黄色
9．黒茶褐色・暗灰黄色
10．暗黄灰色
11．暗黄淡茶色



③

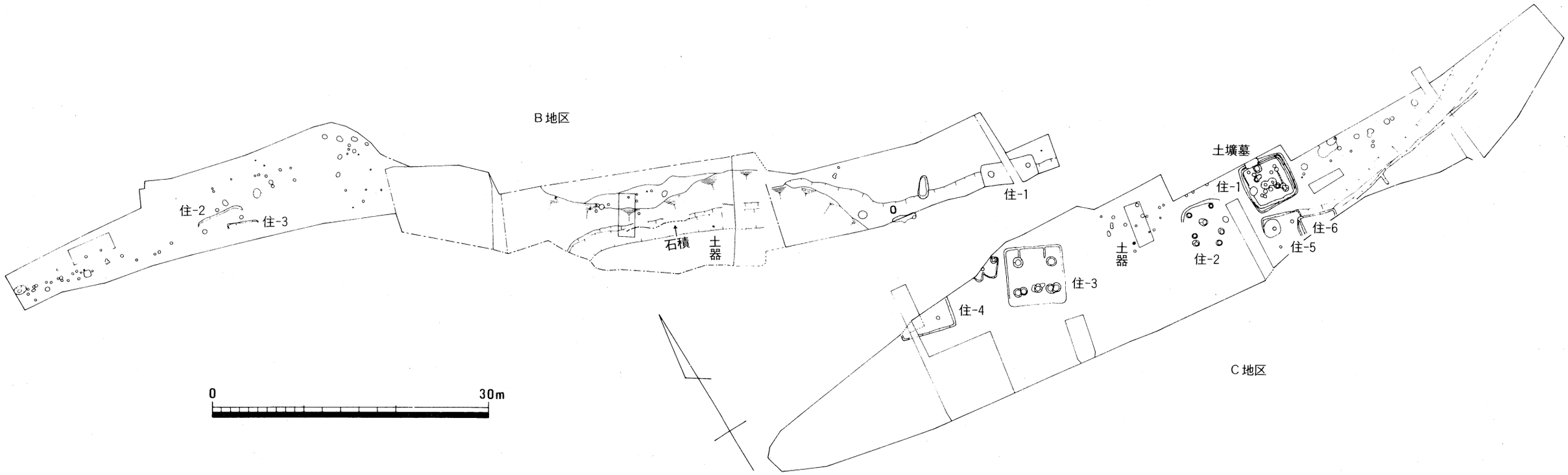
1．暗灰青色
2．白黄色・黒茶色・暗黄茶色
3．黒茶色・暗黄色
4．黒暗褐色・暗黄淡茶色
5．黒暗茶褐色
6．黄色黒茶暗黄茶色
(若干灰を含むようである)
7．砂礫若干礫少ない
8．砂礫
9．黒茶色・若干の暗青灰色
10．暗褐色
11．黄色暗茶
12．黄暗茶色
13．黄暗赤茶色
14．暗緑青灰色
15．暗青灰色
16．青灰色・暗黄茶色
17．黒灰暗青色
18．黒暗褐色黒青暗灰色
19．黒色・黒褐色
20．黒色・黒茶褐色
21．暗黄茶色・灰暗緑色(少)
22．黒色黒茶褐色黒灰青色
23．黒色黒茶褐色
24．暗黄茶色黒灰暗褐色
25．黒褐色暗黄淡茶色黒灰青色
26．黄白色黒茶褐色暗黄茶色
27．暗茶色暗黄茶色



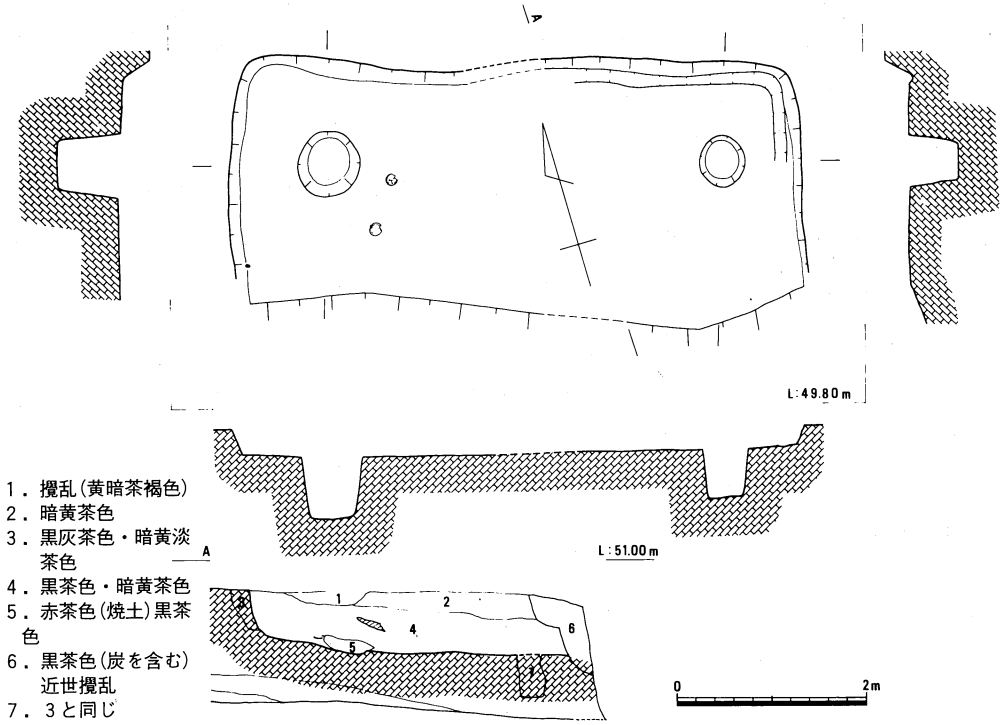
④

1．黒灰色(耕作土)
2．暗黄茶褐色
3．暗茶褐色灰暗黄白色
4．暗赤茶褐色
5．アンキョ
6．黒茶褐色暗黄灰白色
7．暗赤茶褐色暗黄茶色
8．暗黄色暗黒茶黒褐色
9．茶明褐色白黄色黒褐色
10．白黄色暗黄淡茶色黒茶色
11．暗黄白色黒茶淡褐色茶明褐色
(小礫も含む)
12．砂礫層
(大)(大)
13．淡黄暗茶色
14．黄茶淡褐色白淡黄色黒茶褐色
15．砂礫層
㊥㊥
16．白黄暗茶色
17．白淡黄色暗茶褐色
17．白淡黄色暗黄淡茶色

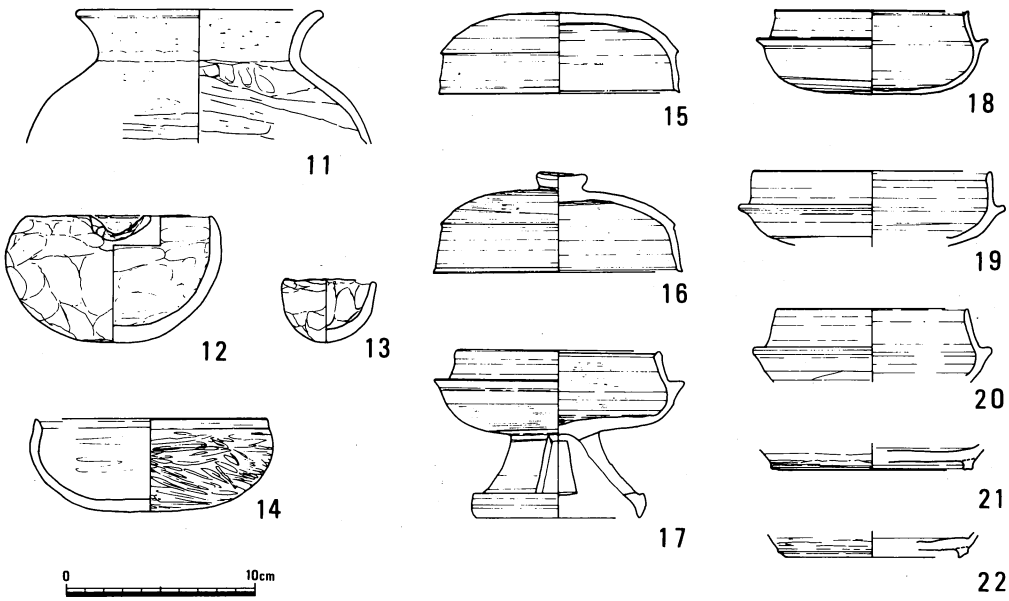
第9図　B地区土層断面図（1／100）



第10図　Ｂ・Ｃ地区遺構配置図（１／500）



第11図　B地区1号住居址平・断面図（1／80）



第12図　B地区1号住居址（11～20）・同付近出土遺物

出面からの深さ約30cmである。

床面も残っていないことから住居址に伴う遺物は検出されていない。周辺の遺構などの関連から古墳時代に属するものと推定される。

3号住居址（第13図、図版９－１）

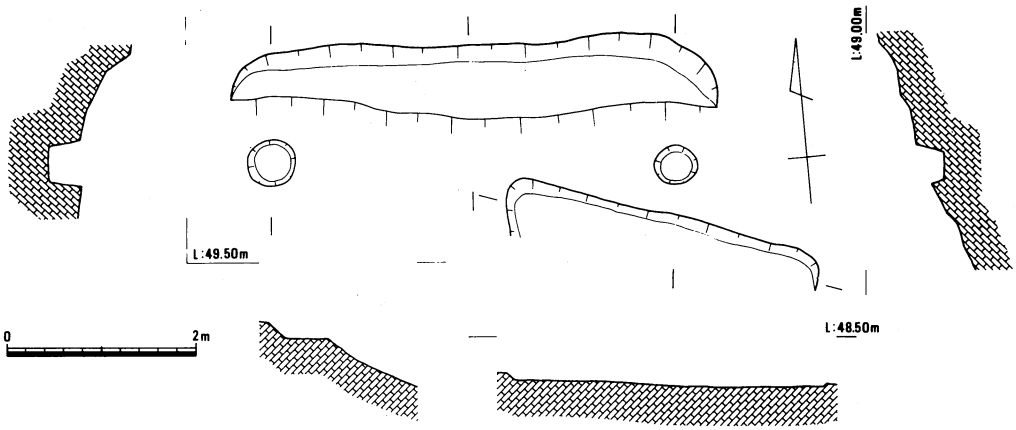
Ｂ地区の西端部近くに位置している。傾斜面の肩部に位置し、南側は水田造成のため削られ、住居址北側の一部がわずかに残存しているにすぎない。２号住居址とは重複するところに位置している。平面形は方形と推定される。北壁はN70°Wを示している。コーナーの一部は残存しているが、柱穴は判明していない。

床面も残っていないことから、住居址に伴う遺物は確認されていない。周辺の遺構などの関連から古墳時代に属するものと推定される。

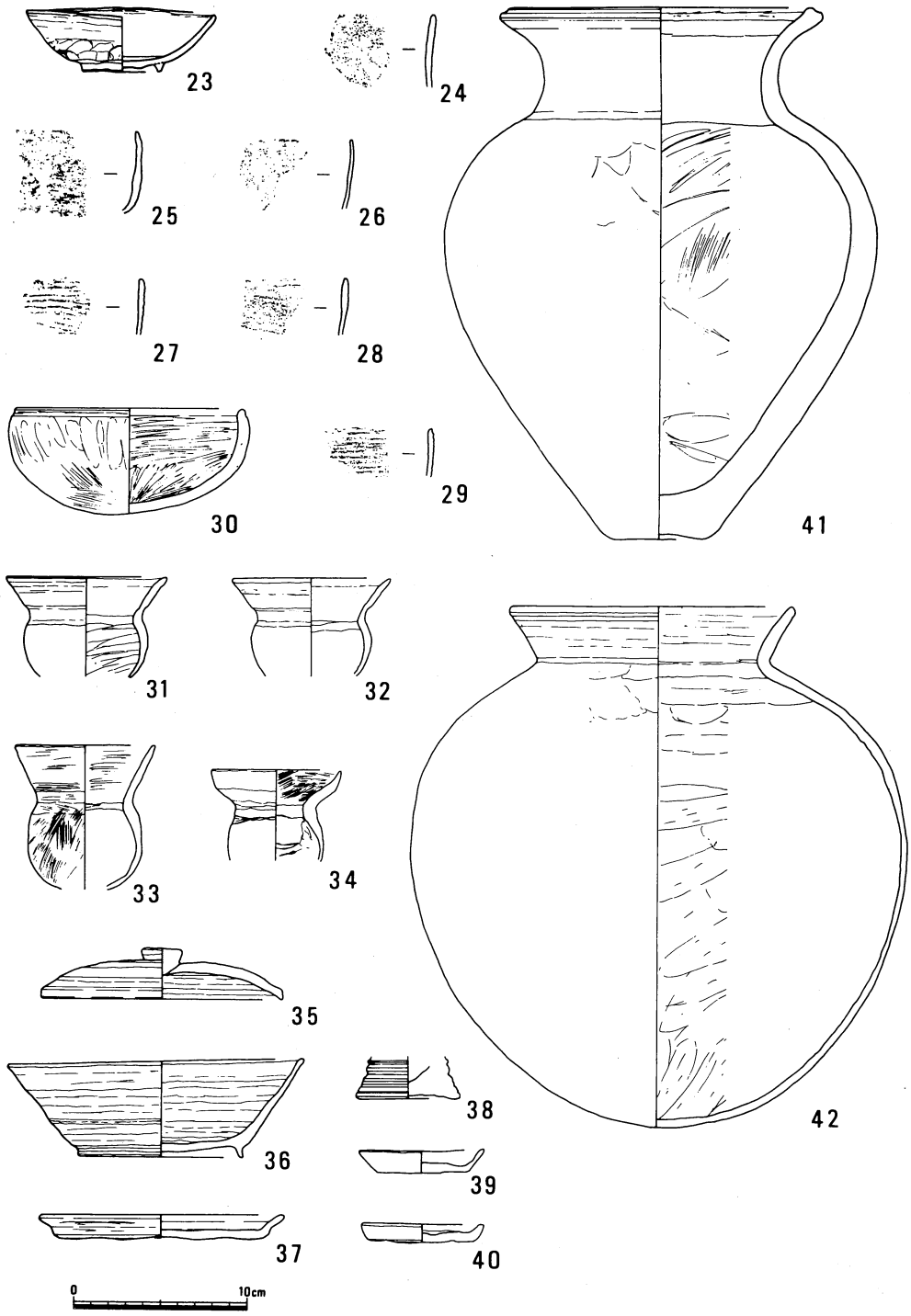
(2)　その他の遺構・遺物（第10・14図、図版８－２）

Ｂ地区の南部には住居址のほかにまとまらない柱穴が多い。Ｂ地区の中央部分は谷状を呈しているが、肩部に少数の柱穴がある。東部には１号住居址のほかに時期不明の土壙がある。

第14図はＢ地区の包含層中から出土した遺物である。41は弥生時代後期の壷である。口縁は外湾しながら開き、肩部が張り、底部はすぼまる。31～34は土師器の小型丸底壷である。42は丸底の甕である。24～29は簿手の小型土器の外面に平行タタキが施されていて、製塩土器とされているものである。30は土師器の杯である。35は須恵器のつまみ付蓋、36は高台付杯、37・39・40は土師器の皿、23は高台付椀である。第12図21・22は須恵器の高台付杯で、第16図８は中世の擂鉢の底部である。



第13図　Ｂ地区２号（左）・３号（右）住居址平・断面図（１／80）



第14図　B地区出土遺物

第3節　C地区の調査

1．C地区の概要

山裾部が緩やかに南へ突出している。最も張り出した裾部が削られるため、東西約100m、南北10～15mの範囲について全面調査を実施した。西端部と東端部付近には遺構は検出されなかったが、中央部の突出部の少し高くなったところには弥生時代から古墳時代の竪穴住居址、土器溜りなどがあり、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製紡錘車、石器類を出土した。ふせた甕の中に小皿を多数納めた状態の遺構も検出され、他に、近世の土壙墓がある。

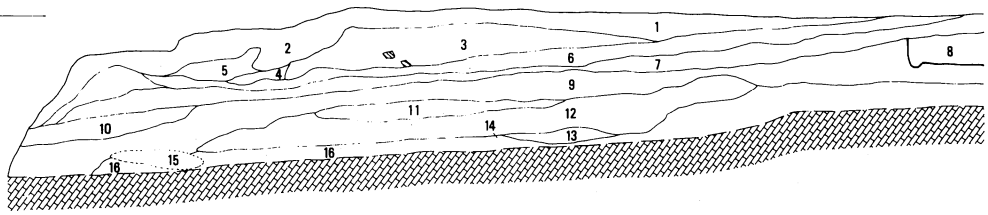
2．C地区の遺構・遺物

(1)　竪穴住居址

1号住居址（第17～19・21図、図版10－2・11～14・23）

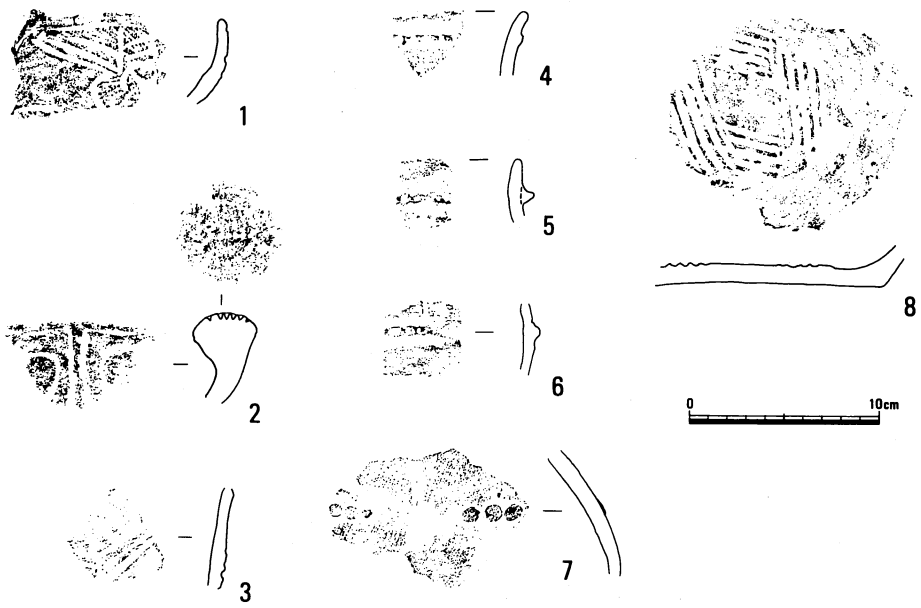
突出部の中央部に位置し、保存状態の良好な住居址である。埋土中および最終床面には炭化材や土器を多く出土した。平面形は方形を呈している。壁体溝は2本あり、建て替えが行われたことがわかる。東壁はほぼ南北方向を示している。大きさは東西5.4m、南北5.4mである。内側の壁体溝で測ると東西4.9m、南北4.8mである。いずれもほぼ正方形に近い形を呈している。

床面では多数の穴が検出された。柱穴と確認されるものが3本ずつみられる。柱穴からみると2回の建て替えが行われたことがわかる。最小の組み合わせはP1・P2・P3・P4であると判断される。柱間はP1～P2が1.4m、P2～P3が1.6m、P2～P3が1.5m、P1～P4が1.8mである。柱穴の大きさは径40～60cm、深さ60～70cmである。柱痕跡のわかるP4で測ると



1．黒茶褐色
2．暗黄茶淡褐色
3．黒茶褐色暗黄茶淡褐色
4．暗灰色暗茶色
5．暗灰色赤茶色
6．淡灰白黄色暗茶色(少)
7．暗茶色白灰黄色(少)
8．黒茶褐色
9．暗茶淡褐色
10．暗茶褐色
11．暗黄茶色黒褐色
12．黒褐色
13．黒褐色
14．黒色暗赤茶褐色
15．礫層
16．暗黄茶色礫層

第15図　C地区土層断面図（1／80）



第16図　Ｂ・Ｃ地区出土遺物

径16cmの柱と推定される。

次にひと回り大きくなった時の柱穴はＰ５、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８であると判断される。柱間はＰ５～Ｐ６が2.45m、Ｐ６～Ｐ７が2.2m、Ｐ７～Ｐ８が2.4m、Ｐ５～Ｐ８が2.1mである。柱穴の大きさは径40～60cm、深さ60～80cmである。柱痕跡のわかるＰ６で測ると径約16cmの柱と推定される。

最終段階のものはＰ９・P10・P11・P12であると判断される。柱間はＰ９～P10が2.4m、P10～P11が2.4m、柱穴の大きさは径30～60cm、深さ40～70cmである。柱痕跡のわかるＰ９で測ると径約16cmである。

４本柱で囲まれた中に２個の土壙がある。P13とP14で、P14は浅く、P13は60cmの深さである。いずれもほぼ円形を呈している。北壁の中央より少し西に寄ったところで、壁に接するP15の土壙がある。平面形は隅丸方形を呈している。大きさは東西80cm、南北84cm、深さ36cmである。西壁のほぼ中央に接してP17の土壙がある。平面形は楕円形を呈している。大きさは長径１m、短径80cm、深さ15cmで、浅い土壙である。P17の北側には東西方向の溝が壁体溝から西側の柱を結ぶ線まで続いている。幅22cmの浅い溝であるが、間じきりの痕と推定される。

埋土を除くと炭化材が検出される。特に北壁側によく残っていて、棰木と推定される炭化材が肩部から床面へ向かって傾斜する状態でみられる。このことは最終段階の住居が火災にあって放棄されたものと推定される。

埋土中および床面付近からまとまった遺物が出土している。第18・19図**43～65**が１号住居址

出土の遺物である。43・48は弥生土器で１号住居址に伴うものではない。51も少し新しいがこの住居址の時期のものではない。

44は土師器の甕で、口径16㎝、器高26.3㎝を測り、底部は丸底である。外面には縦位か斜位のハケメが施され、内面は頸部直下までヘラケズリがみられる。45は土師器の甕で、底部を欠失している。口縁部はあまり外反せず、直立ぎみである。外面は縦位か斜位のハケメが施され、内面は頸部直下までヘラケズリがみられる。46～49は土師器の甕の口縁部である。50は須恵器の把手付無蓋高杯である。精巧なつくりで、杯部の稜線はシャープである。口径11.1㎝、器高7.7㎝あり、脚部は短かく、長方形の透しがある。52は土師器の杯で、口径11.6㎝である。53・54は須恵器の杯蓋である。口縁端部や肩部の稜線はシャープで古い時期の特徴を示している。大きさは54が口径12.4㎝、55が口径12.1㎝である。55～57は須恵器の杯身である。口縁端部および受け部は角張っている。大きさは55が口径12.1㎝、56が口径10.8㎝、57が口径11.1㎝、器高5.2㎝である。

58は土師器の鉢で、口径12.8㎝である。59は土師器の高杯で、杯部の口縁は外湾しながら大きく開いている。脚部は杯部に挿入されている。脚の柱状部は大きくひらき、裾部で一度屈曲してさらにひろがる。内面には明確な稜線がみられる。60は土師器の鉢で、口径11.6㎝、器高7.7㎝で、底部は丸底である。61～65は小型手捏ね土器である。内外面に指頭圧痕が残っている。第21図46～48・51が埋土中から出土した石器である。51はサヌカイト製であり、47は石斧であって、１号住居址に伴うものではない。46・47は叩石で１号住居址に伴うものと推定される。

時期は出土遺物から５世紀後半に比定される。

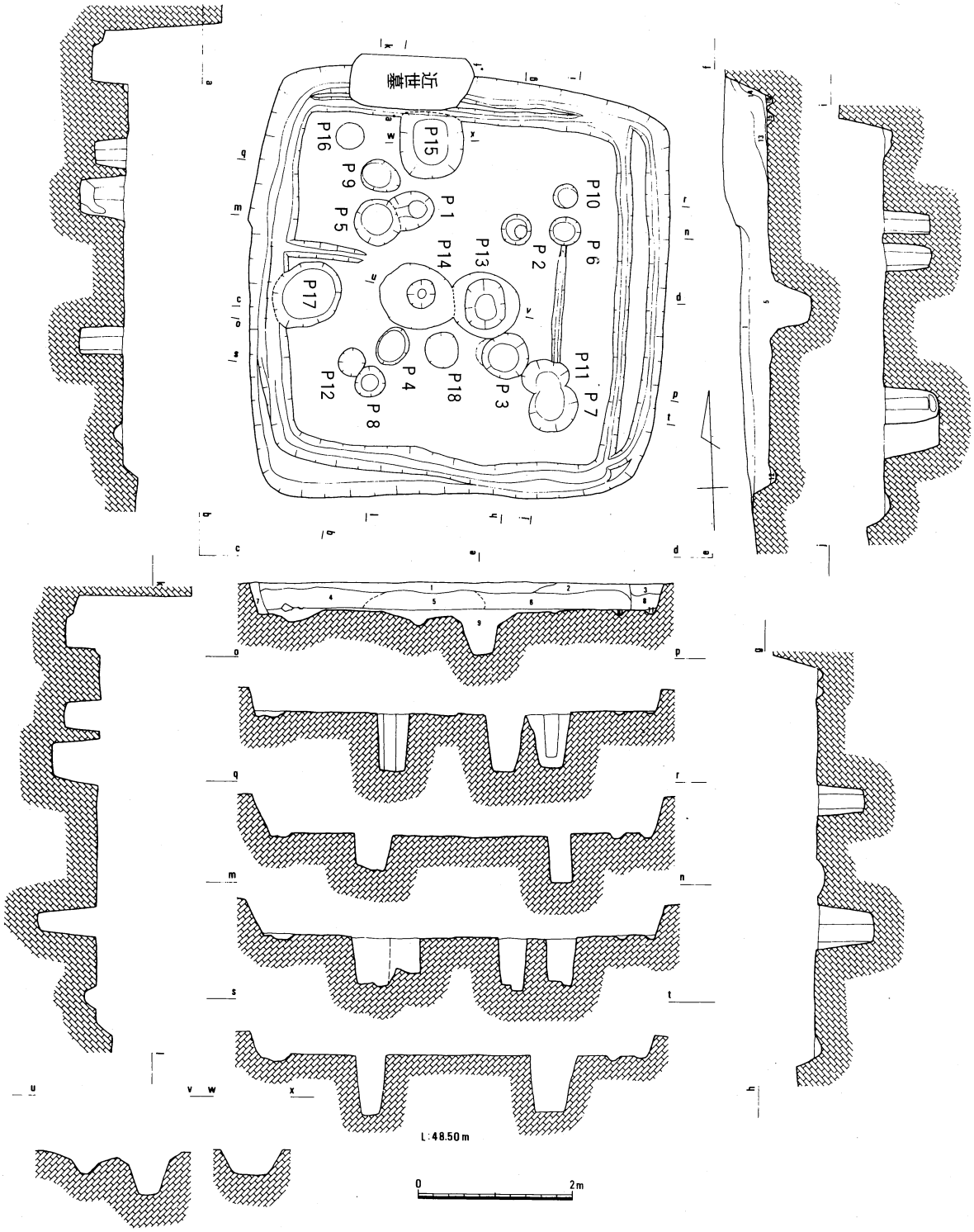
２号住居址（第20・21図、図版16－１、２・17－１、２）

Ｃ地区の中央部に位置し、１号住居址の西側にある。上面が削平されているため、壁は北側で一部残っているにすぎない。床面もかなり削平されている。北壁付近にはわずかに壁体溝が残っている。２号住居址に関係すると思われる柱穴は７本確認された。Ｐ４とＰ５はＰ６とＰ７の建て直しと推定されることから５本柱であったものと推定される。Ｐ８は住居の中央土壙と考えられる。これから判断して，円形に近い平面形を呈し，直径６～７ｍの大きさと推定される。

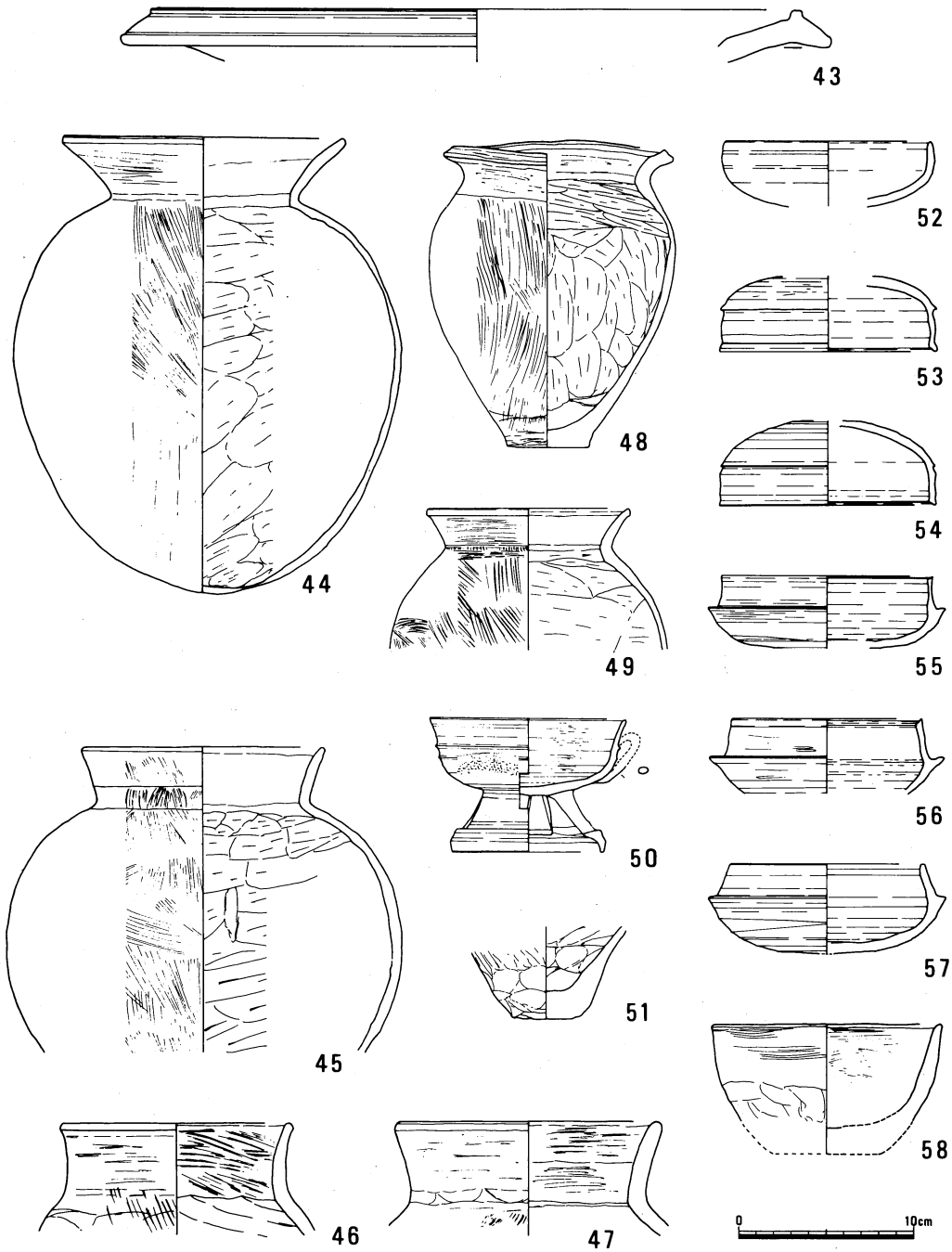
柱間はＰ１～Ｐ２が2.6ｍ、Ｐ２～Ｐ３が2.2ｍ、Ｐ３～Ｐ４が1.4ｍ、Ｐ４～Ｐ５が３ｍ、Ｐ１～Ｐ５が2.4ｍ、Ｐ３～Ｐ６が2.7ｍ、Ｐ６～Ｐ７が2.6ｍ、Ｐ１～Ｐ７が3.2ｍである。柱穴の大きさは50～80㎝、深さ22～50㎝である。中央の土壙は長径１ｍ、短径80㎝、深さ28㎝である。

埋土中の遺物はわずかに残った北壁部分の壁体溝上部から第21図52の太型蛤刃石斧、49の叩石が出土した。他に50の叩石も出土している。第26図10は埋土中から出土した管玉である。

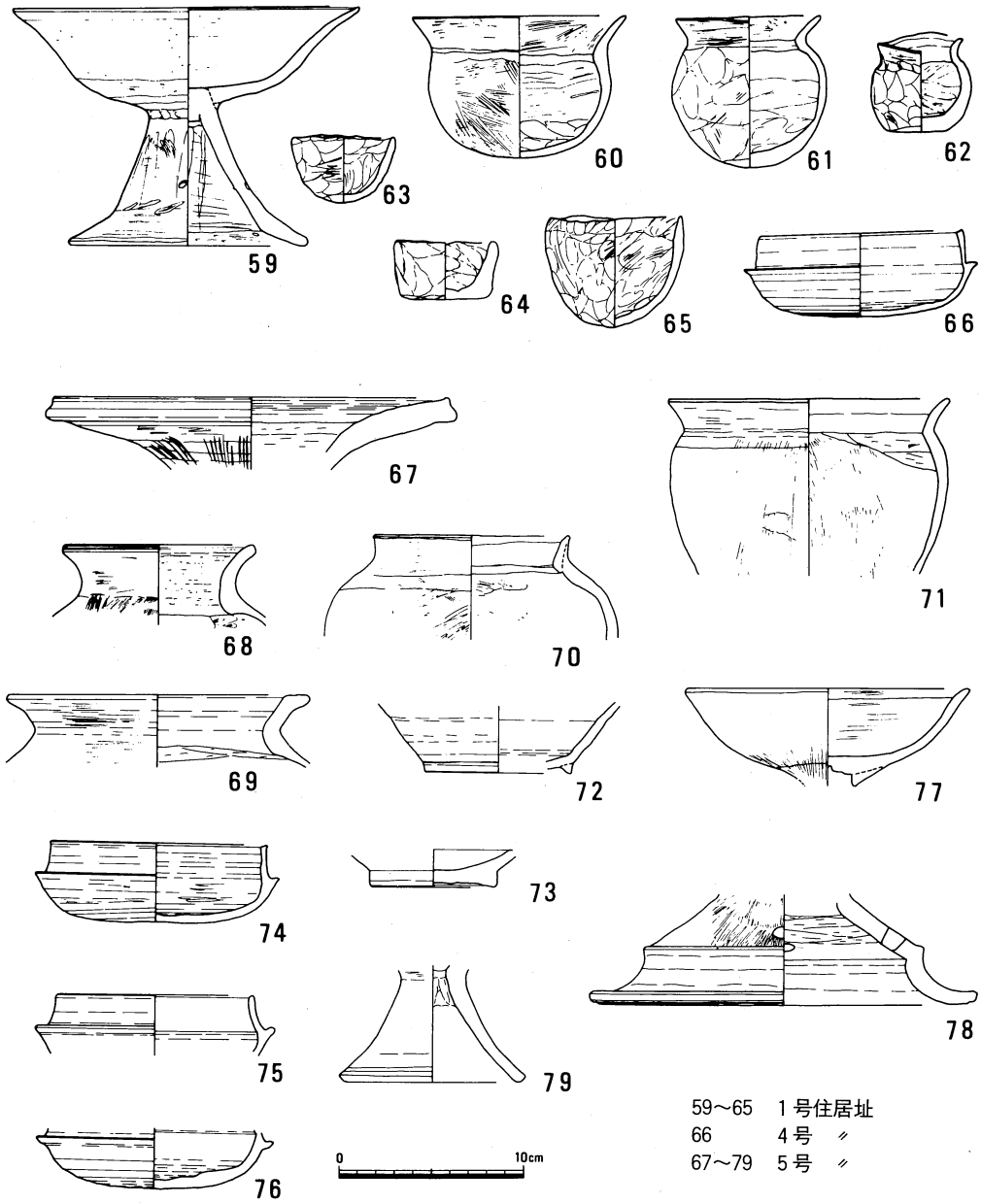
住居址の時期は形態等から弥生時代のものと推定される。



第17図　Ｃ地区１号住居址平・断面図（１／80）



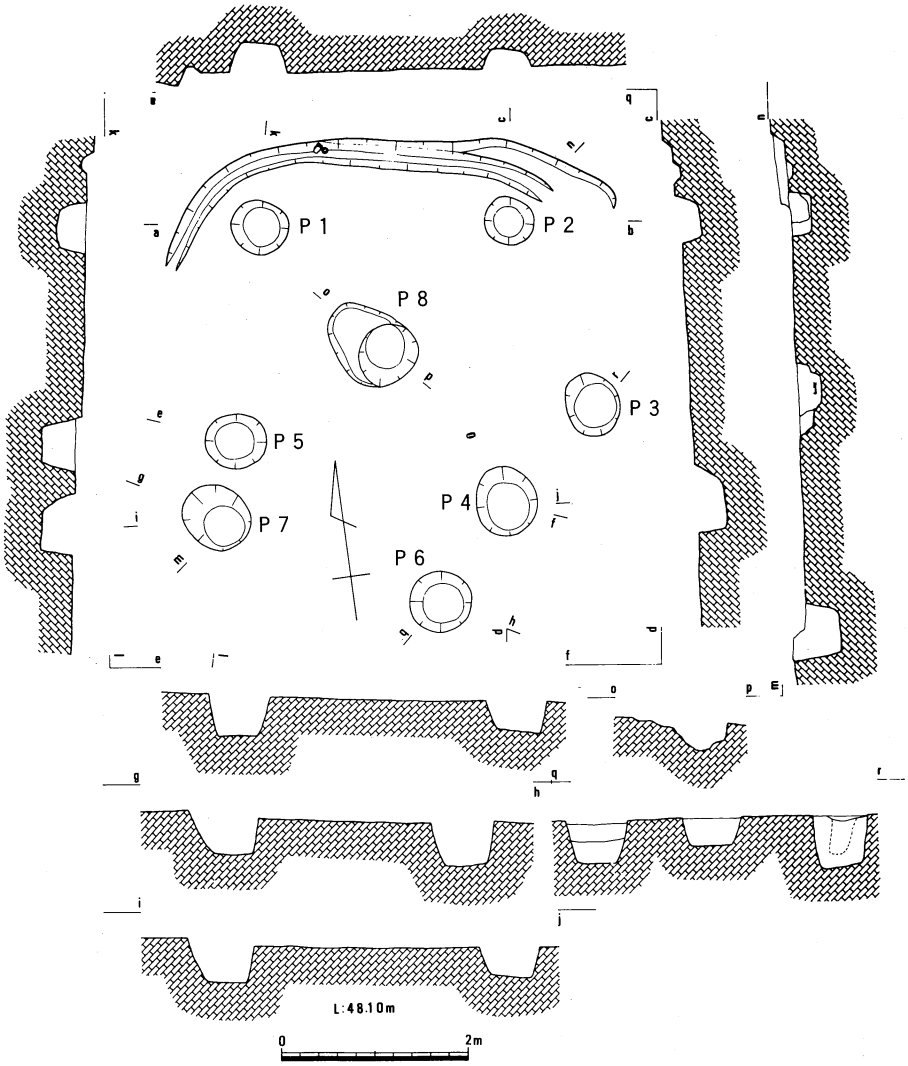
第18図　C地区１号住居址出土遺物



第19図　C地区1、4、5号住居址出土遺物

3号住居址（第22・23図、図版18－1、2・19－1・23・25）

C地区の西寄りに位置している。南側は斜面になり、一部流失している。平面形は方形を呈し、壁体溝があるが、南側は流失して残っていない。北側の方向はN63°Wを示している。大きさは東西6.4m、南北（推定）6.4mで、ほぼ正方形である。1号住居址より少し大きいが平

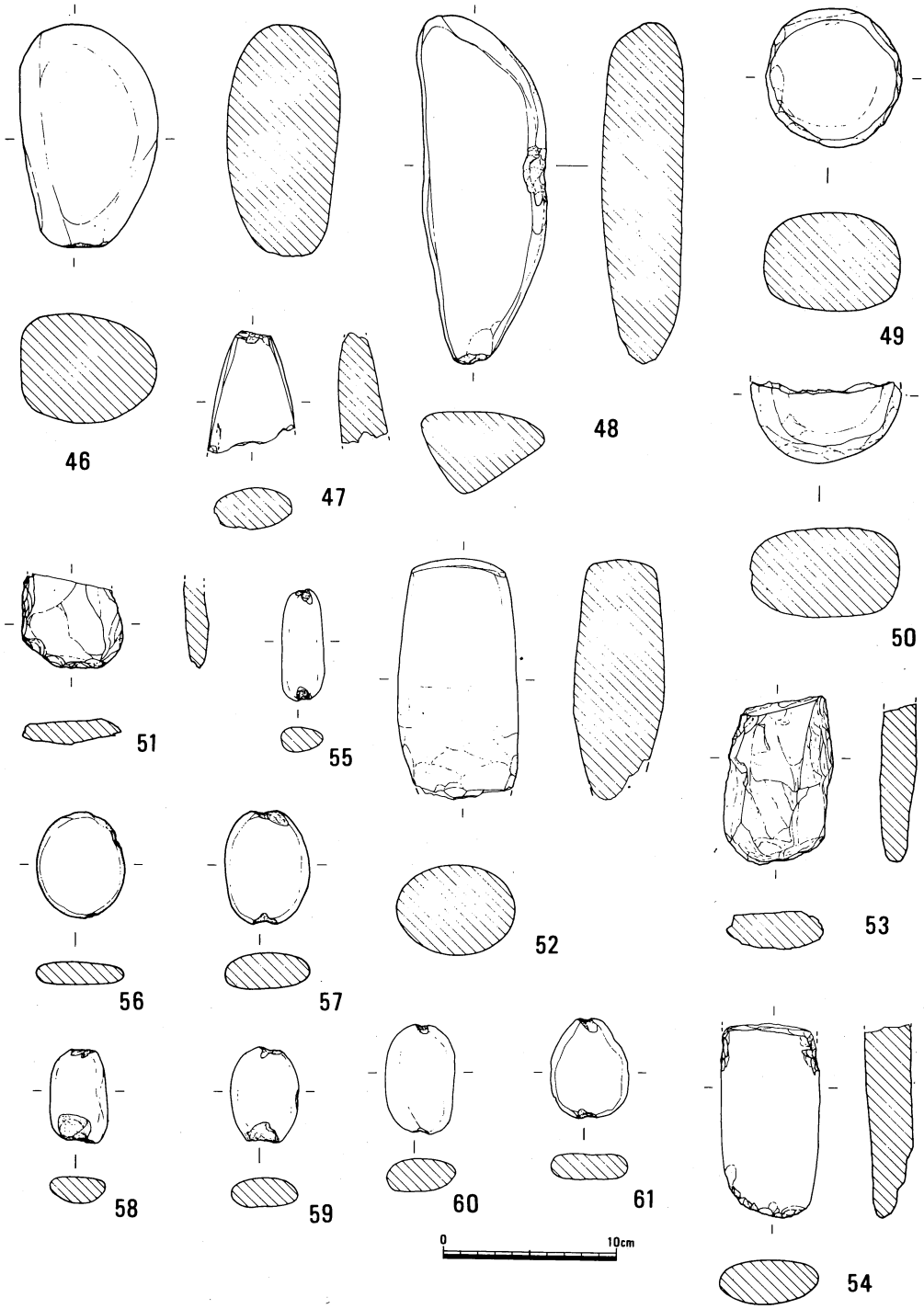


第20図　C地区２号住居址平・断面図（１／80）

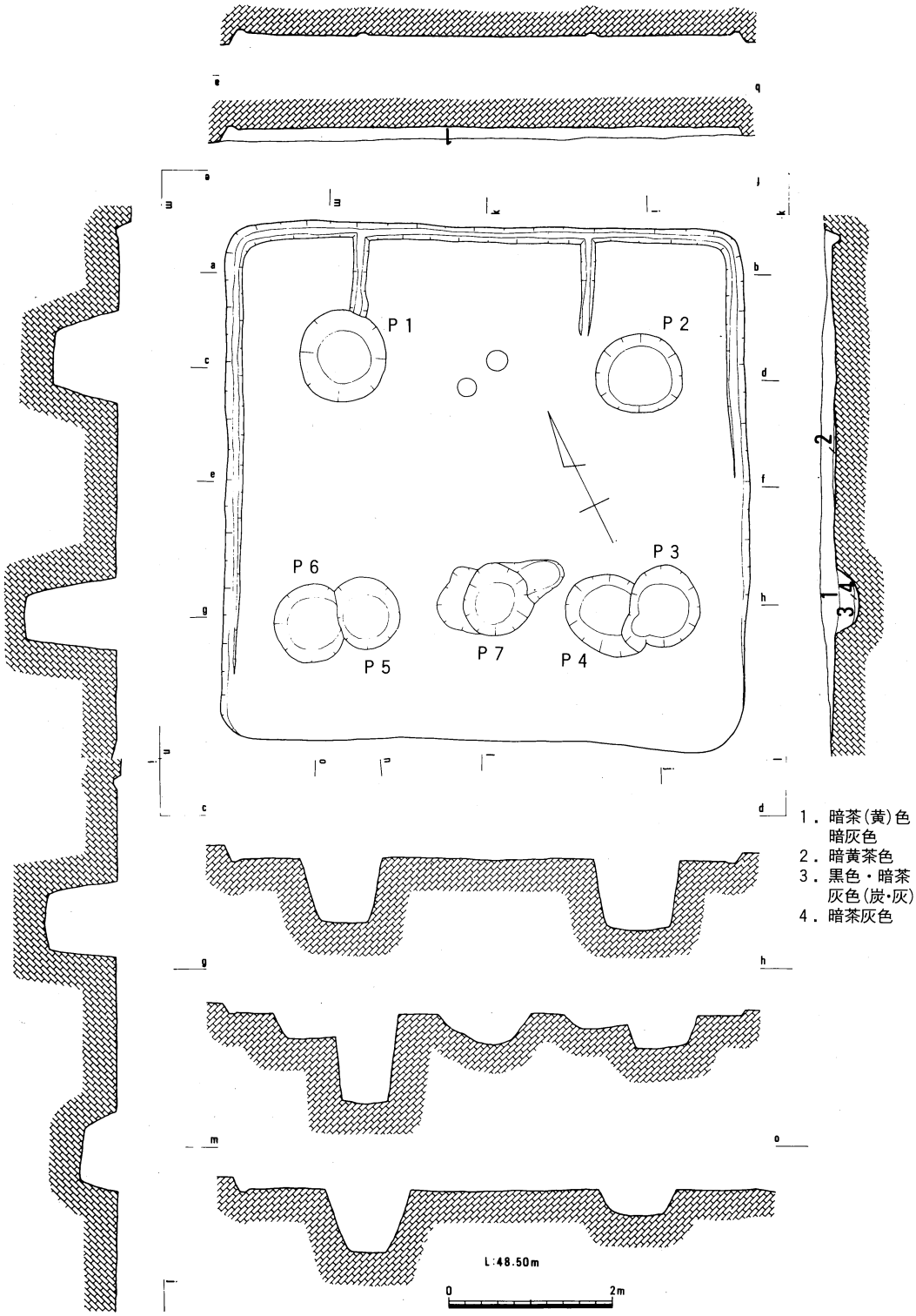
面形は類似したものである。床面で柱穴は６本確認された。南側のＰ３とＰ４、Ｐ５とＰ６は建て直しと推定されることから４本柱と考えられる。

柱間はＰ１～Ｐ２が2.88m、Ｐ２～Ｐ４が2.88m、Ｐ３～Ｐ５が3.65m、Ｐ４～Ｐ６が3.8m、Ｐ１～Ｐ５が3.2m、Ｐ１～Ｐ６が3.25mである。柱穴の大きさは径85～110㎝、深さ40～110㎝と大きい。Ｐ７は深さ20㎝の浅い土壙である。Ｐ１とＰ２からそれぞれ北壁まで細い溝があり、間じきりの痕と推定される。

埋土中からは第23図の石製紡錘車が１点出土している。大きさは直径4.6㎝、高さ１㎝であ



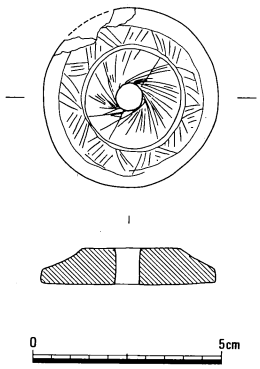
第21図　Ｃ地区出土遺物（１／４）



第22図　C地区3号住居址平・断面図（1／80）

る。中央部に直径6㎜の穴が通っている。上面および側面には鋸歯文風の文様がきざまれている。他に良好な遺物は出土していない。

時期は石製紡錘車と平面形から1号住居址と同じ5世紀後半に比定されるものと考えている。



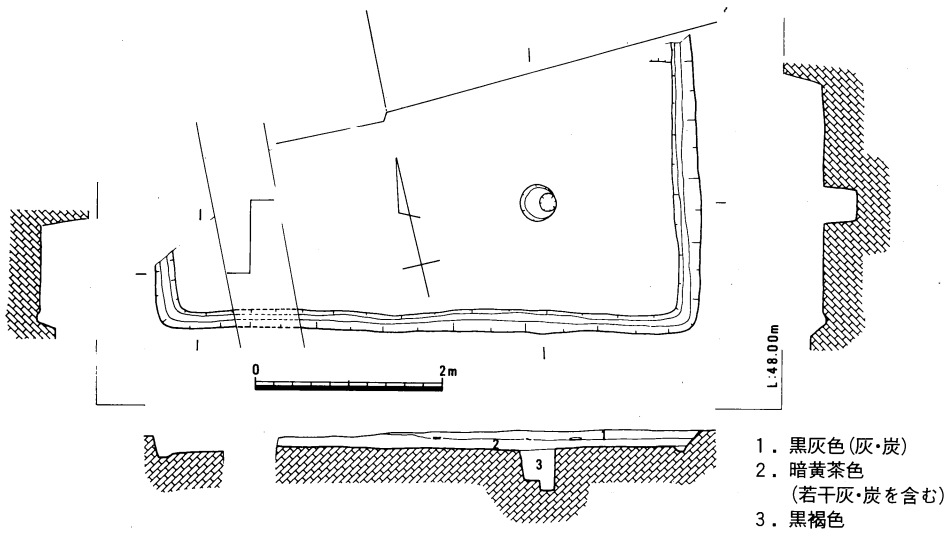
第23図　C地区3号住居址出土遺物（1／2）

4号住居址（第24図、図版19－2、20－1、2）

C地区の西寄りに位置し、3号住居址の両側にある。北側が未調査区域になることから南側約3分の1を調査しただけである。平面形は方形を呈し、南壁はN77°Wを示し、ほぼ東西方向である。大きさは東西5.8m、南北3.2m以上である。壁体溝はめぐっている。床面では南東コーナー寄りに柱穴が1本検出された。位置関係から4本柱と推定される。柱穴の大きさは径40㎝、深さ36㎝である。柱のめり込みと思われる痕があり、これによると径16㎝の柱と推定される。

埋土を除くと炭火材が検出され、火災をうけて放棄されたことが推定される。埋土中からの出土遺物には第19図66がある。須恵器の杯身で、口径10.9㎝、器高4.6㎝を測る。口縁端部や受け部の角はシャープで古い様相を示している。

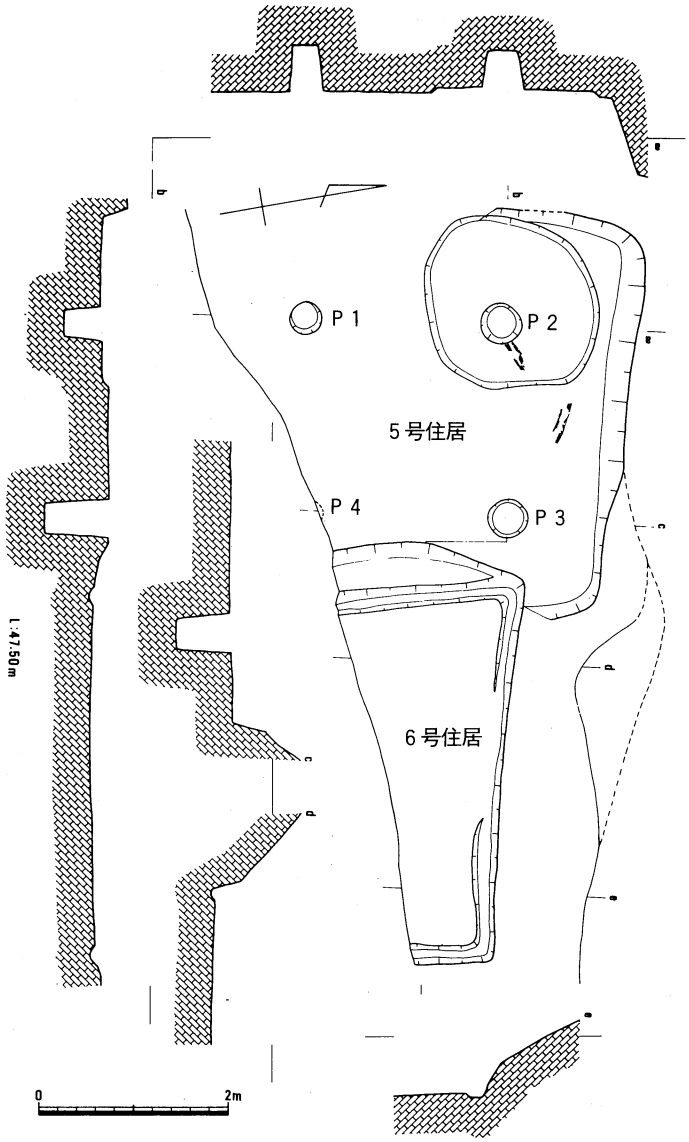
時期は出土遺物から5世紀後半に比定される。



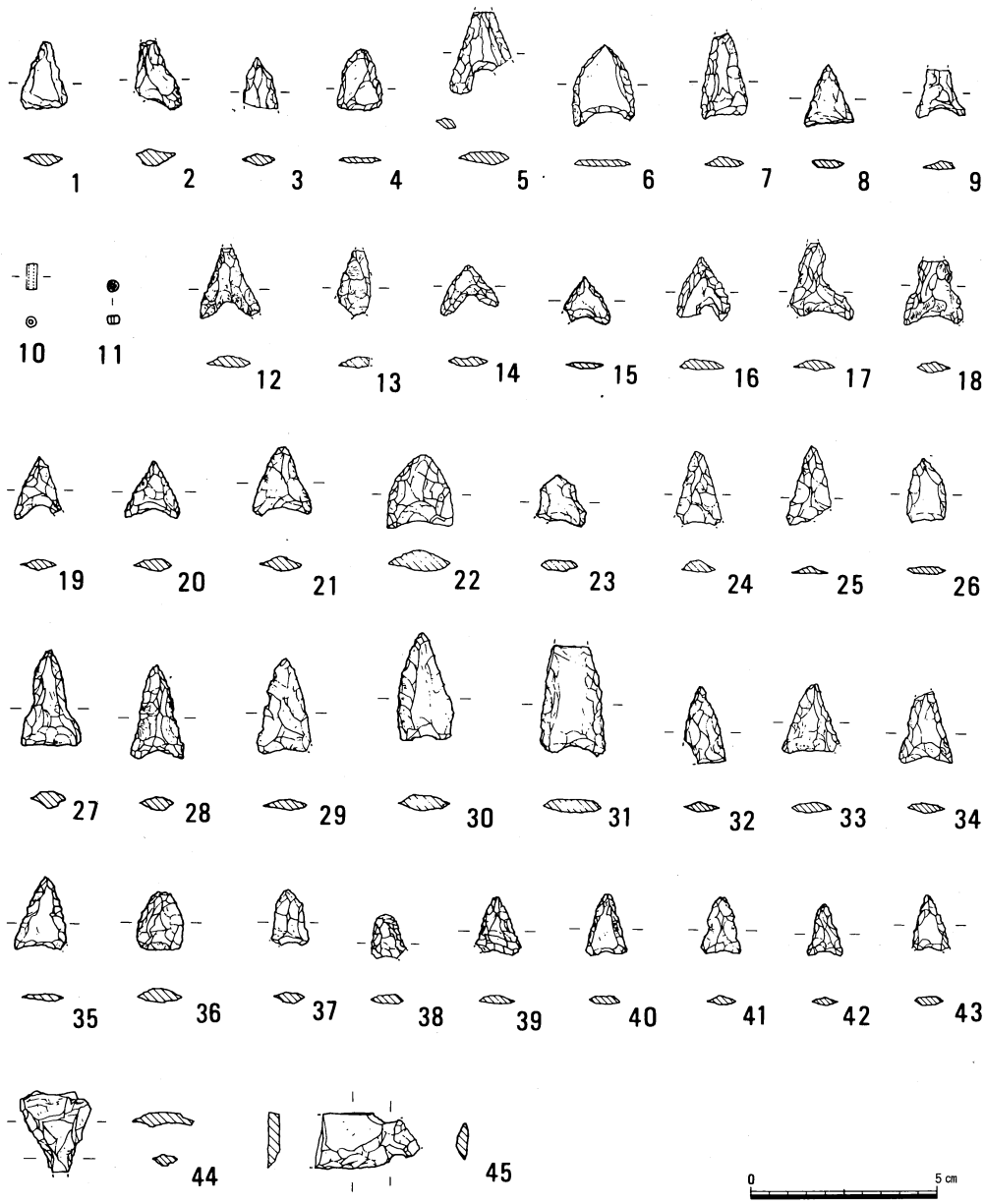
第24図　C地区4号住居址平・断面図（1／80）

5号住居址（第25図、図版21－1）

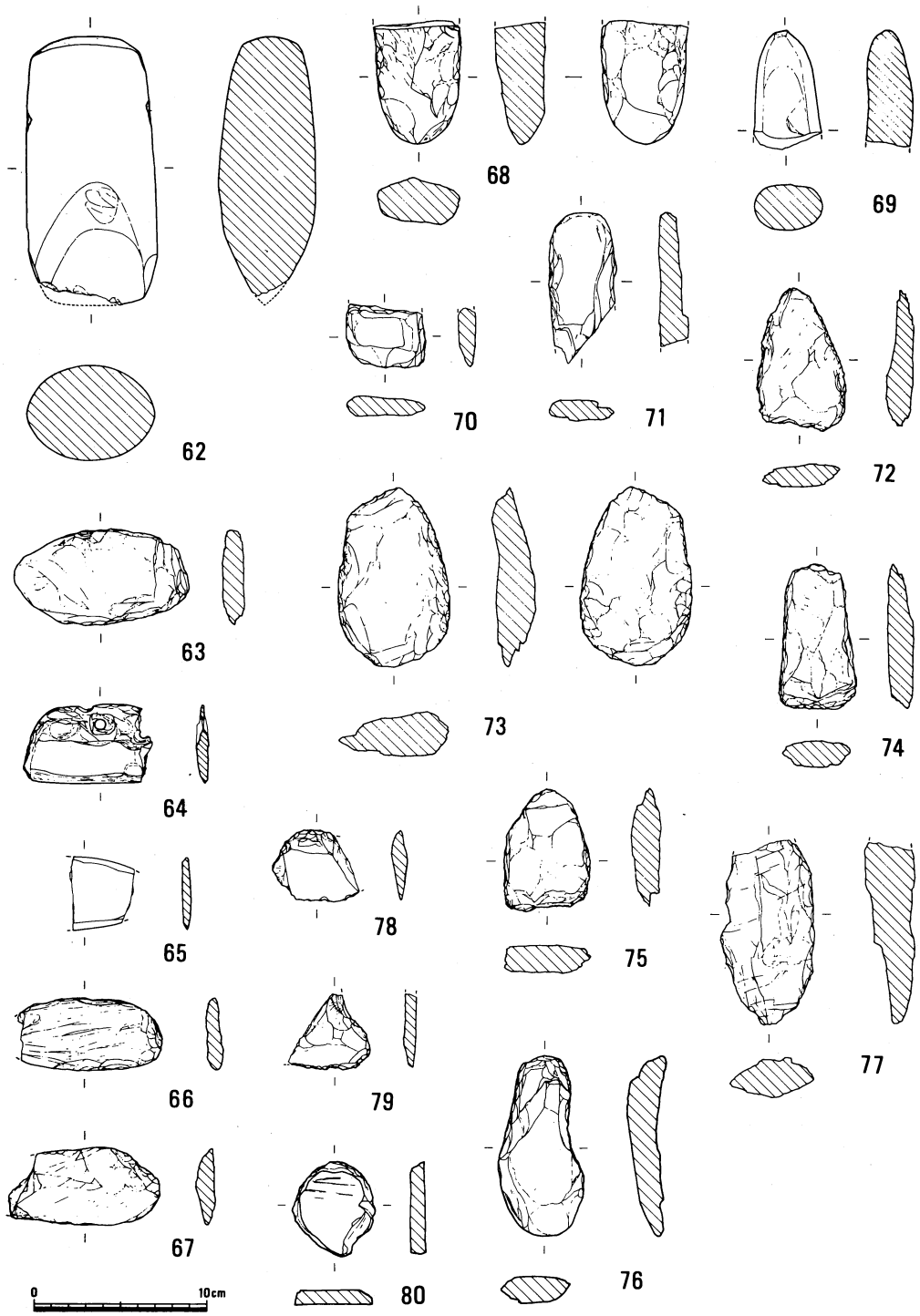
C区の中央部に位置し、1号住居址の南側にある。6号住居址と1部重複し、南側は削られている。平面形は方形を呈し、北壁はN74°Wを示している。床面からは3本の柱穴が検出された。もう1本はわずかに崖面で確認されたことから4本柱であることがわかる。柱間はP1～P2が2.1m、P2～P3が2.1m、P3～P4が2.1m、P1～P4が2.1mを測り、正方形である。



第25図　C地区5号（上）・6号（下）住居址平・断面図（1／80）



第26図　Ｂ・Ｃ地区出土遺物（１／２）



第27図　B・C地区出土遺物（1／4）

埋土中からは第19図67～79の遺物が出土している。67～69・78・79は弥生土器で、5号住居址に伴うものではない。72・73は後の時期のものが混入したものである。70・71も5号住居址よりは古い時期のものである。74～76・77が5号住居址に伴う遺物である。74～76は須恵器の杯である。74は口径11.8cm、器高4.6cm、75の口径は10.8cmである。77は土師器の高杯である。口径15.5cmである。第21図53・54・61も埋土中から出土した石器である。61は石錘で5号住居に伴う可能性がある。

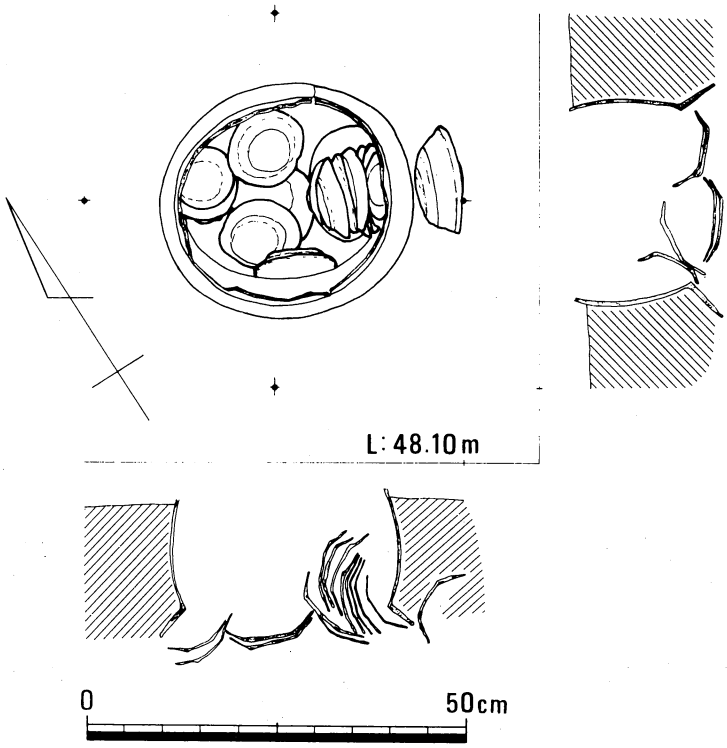
時期は出土遺物から5世紀後半に比定される。

6号住居址（第25図、図版21－1・23）

C区の中央部に位置し、1号住居址の南側にある。南側は大きく削られていて、北側の約3分の1を調査した。平面形は方形を呈している。壁体溝がめぐっている。大きさは東西4.1m、南北2m以上である。床面で柱穴を検出することはできなかった。埋土中からは良好な遺物は出土していない。

小皿納入甕（第28・29図、図版10－1・24）

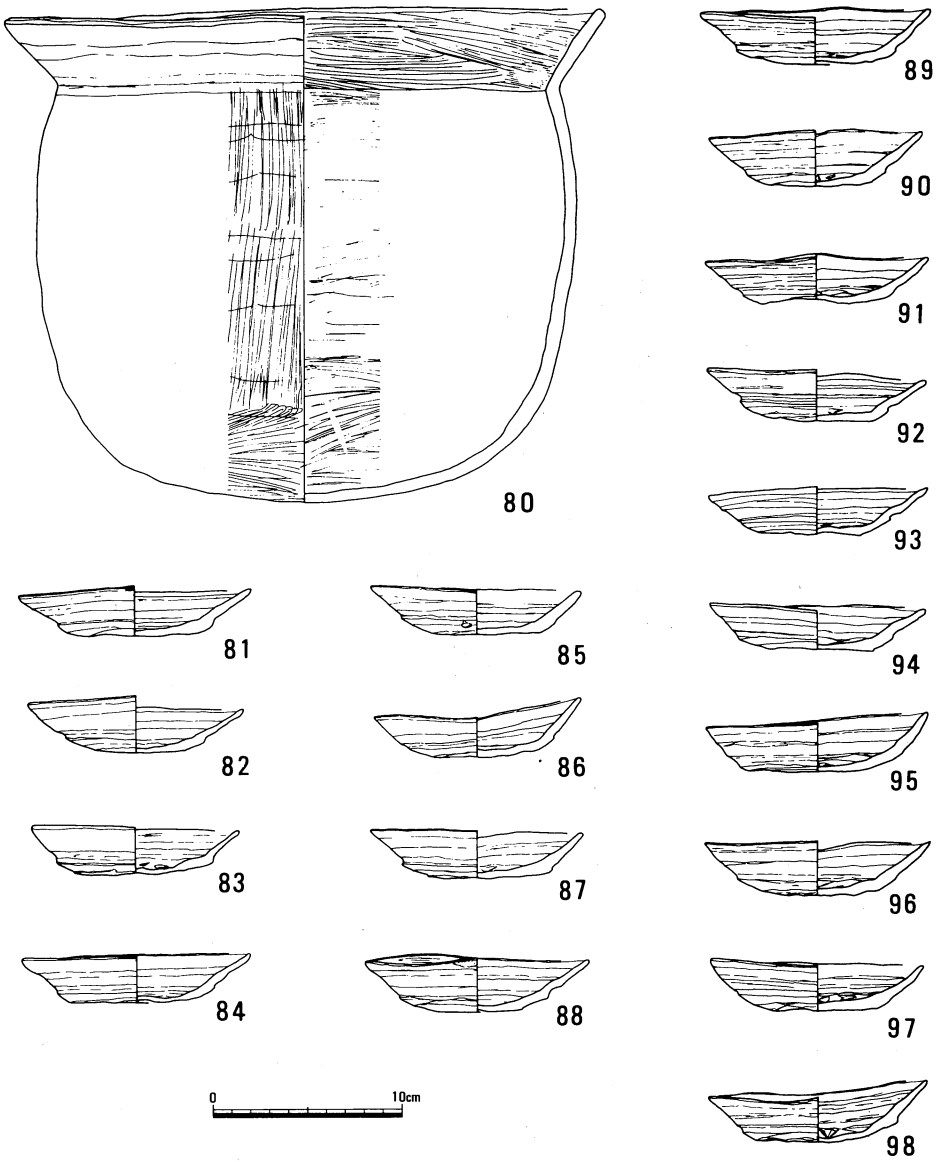
C地区の中央部で、3号住居址の東側に位置する。甕をふせた中に小皿を多数納めた遺構で



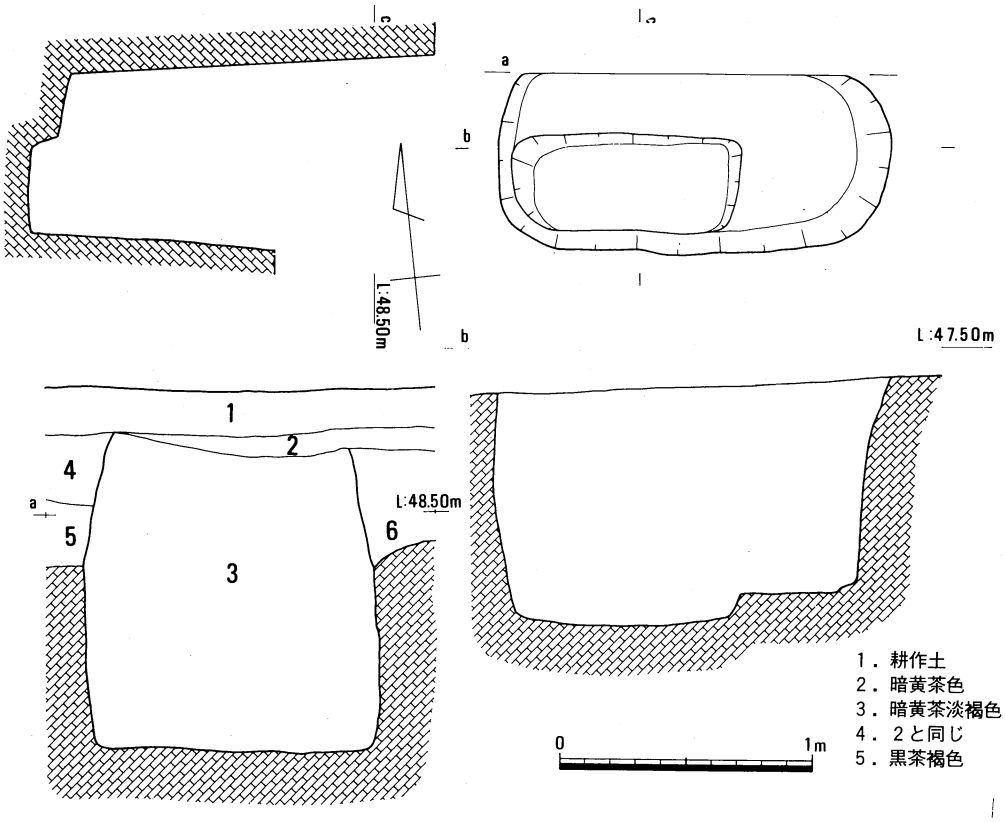
第28図　C地区小皿納入甕平・断面図（1／10）

ある。笠岡市本谷遺跡（注）においても同様な遺構が検出されていて関連が注目される。明瞭な掘り方を確認していないが、甕の中へ小皿を入れて、土壙の中へふせたものである。ふせる時に甕から外へ出たものが１点みられる。小皿は全部で18枚ある。

甕は口縁部をくの字状に曲げ、胴部はほぼ筒状を呈し、底部はなべ底状になっている。外面では胴部に縦位のハケメ、底部に横位のハケメを施している。内面は横位のハケメである。口



第29図　C地区小皿納入甕出土遺物



第30図　C地区土壙墓（1／30）

径31.7㎝、器高26.4㎝である。81～98は甕の中に納められていた小皿である。底部は平底で、口縁部は外へひらき、端部はうすくなる。口径は10.9～12.2㎝、器高2.6～3.3㎝である。

時期は鎌倉時代～室町時代に比定される。

㈱　網本善光『本谷遺跡』笠岡市教育委員会　1987年

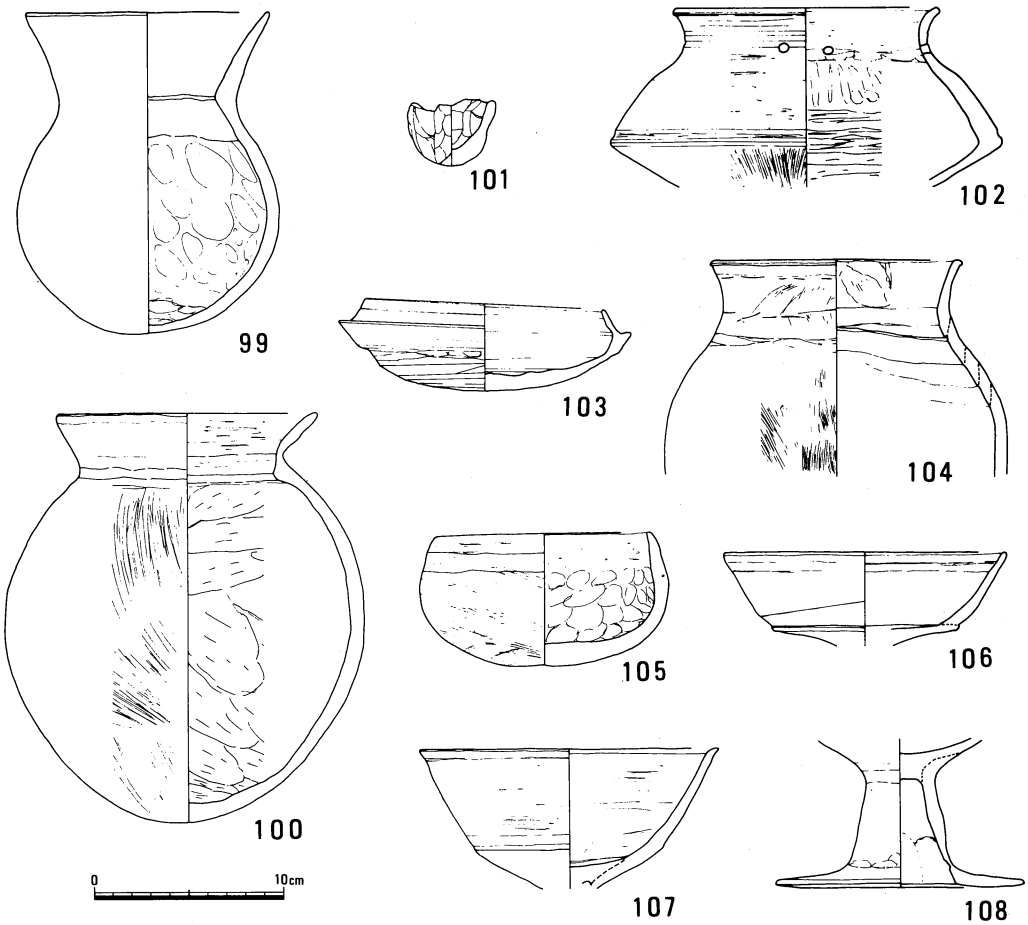
土壙墓（第30図、図版15－1、2）

C地区の中央部に位置し、1号住居址の北壁部分を切り込んでいる。平面形は隅丸方形を呈している。掘り込みはほとんど垂直である。底部には南西隅に接して一段深い掘り込みがある。

大きさは長径156㎝、短径70㎝、深さ84㎝、底部の一段深くなったところは長径90㎝、短径39㎝、深さ10㎝である。良好な遺物は出土していないが近世の土壙墓と推定される。

その他の遺物（第16・21・26・27・31図、図版22・25～27）

B・C地区の斜面からは縄文土器の破片も少量出土している。第16図1～6が縄文土器である。7は弥生土器で、壷の胴部にあたり、外面に円形浮文を配している。時期は弥生時代中期である。第21図55～60はC地区包含層中から出土した石錘である。第26図1～9・12～43はB・



第31図　C地区出土遺物

C地区包含層中から出土した石鏃である。12は黒曜石製のもので、他はサヌカイト製である。形態から縄文時代と考えられるものも含まれている。44は石錐、45は石匙である。第27図62はB地区から出土した太型蛤刃石斧である。64・65はB地区から出土した磨製石包丁である。他の石器はB・C区から出土した石斧・石鏃などである。第31図はC地区から出土した土器である。99は土師器の壷、100・104は土師器の甕、105は土師器の椀、106～108は土師器の高杯、103は須恵器の杯身、101は小型手捏ね土器、102は弥生土器の鉢である。第25図11はC地区で表採されたガラス製小玉である。

表2　伊田沖出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	器高	底径					
1	鉢形土器				内面指ナデ仕上げ，外面スリ消し縄文	白淡黄茶淡褐色	粗細砂かなり混入	良好	Cの西，SH03南東柱穴
2	〃				〃	暗黄暗茶褐色	細粗砂かなり混入	〃	B
3	〃				〃	暗黄茶色	〃	〃	C（西）包含層
4	甕形土器				ヘラ削りのちナデ仕上げ	淡黄茶色（外） 淡灰黄白茶色（内）	多量の粗砂粒を含む	〃	B包含層
5	〃				ナデ仕上げ	暗黄茶色	かなり粗砂粒を含む	〃	〃
6	〃				つまみ出し凸帯	暗黄茶色（外） 灰淡黄白色（内）	多量の粗砂粒を含む	〃	〃
7	壺形土器				内面ヘラ削り	暗茶色（外）黒茶褐色（内）	細砂かなり含む	〃	〃
8	甕形土器				内底部にタタキ目（？）	黒色～黒暗灰色	かなり細粗砂を含む	〃	〃
9	〃	29.1	31.6		内面下半ヘラ削り，上半指押えのちハケナデ・外面細かいクシ目	淡黄茶～灰暗茶色	かなり細砂を混入	〃	A
10	〃	28.15	24.2		内面下半ヘラ削り，上半指押えのちハケナデ・外面クシナデ	黄淡茶色	かなりの量の小石（1～2㎜程度）を混入	〃	A西側のもの
11	壺形土器	13.2			内面頸部下ヘラ削り，外面ナデ	黒色暗黄茶色・黒色茶色（外） 暗赤茶色（内）	若干細粒を含む	〃	BSH01
12	鉢形土器	9.9	7.0		内外面共に指押え	淡黄白茶色	水こし粘土でかなりの粗砂を混入→砂ぼい	〃	〃
13	手捏ね土器	5.0	3.4		〃　（手づくね）	約1／4黒色他は淡茶色（外） 黒色～黒淡茶色（内）	水こし粘土に若干細粗砂混入	〃	〃
14	杯（蓋）	12.3	4,9		内面ナデ・外面ヘラミガキ	白淡黄茶色	水こし粘土に若干の細砂を含む	良	〃
15	〃	12.8	4.3		〃　・外面ヘラ削り，ナデ	黒灰青色（外） 暗青灰色（内）	ごく極か粗砂粒を含む	良好	SH01床面やや上
16	〃	13.2	5.4		内面ナデ，外上面クシ目	黒青灰色	若干細砂を含む（石英）	〃	SH01
17	高杯形土器	10.6	9.0	8.6	〃　，外底部ヘラ削り，他はナデ	〃	ごくわずかの粗砂を含む	〃	〃
18	杯身	10.2	4.5		内外面ナデ・外面底部ヘラ削り	黒灰青色	若干細砂を含む	〃	〃
19	〃	12.4			〃	黒青灰色	ごくわずかの細砂を含む	〃	〃
20	〃	10.0			〃	〃	ごくまれに砂粒（0.5㎜以下）を含む	〃	〃
21	高台付杯			10.6	裏面ヘラ削りのちナデ	黒青淡灰色	かなり粗砂を混入	〃	〃
22	〃			9.0	〃 ヘラおこし	暗青灰色	かなりの細粗砂を混入	〃	〃
23	皿形土器	10.9	3.6	4.6	指押えのちナデ	乳淡灰色	水こし粘土に微砂を混入	良好	B（西）P-21

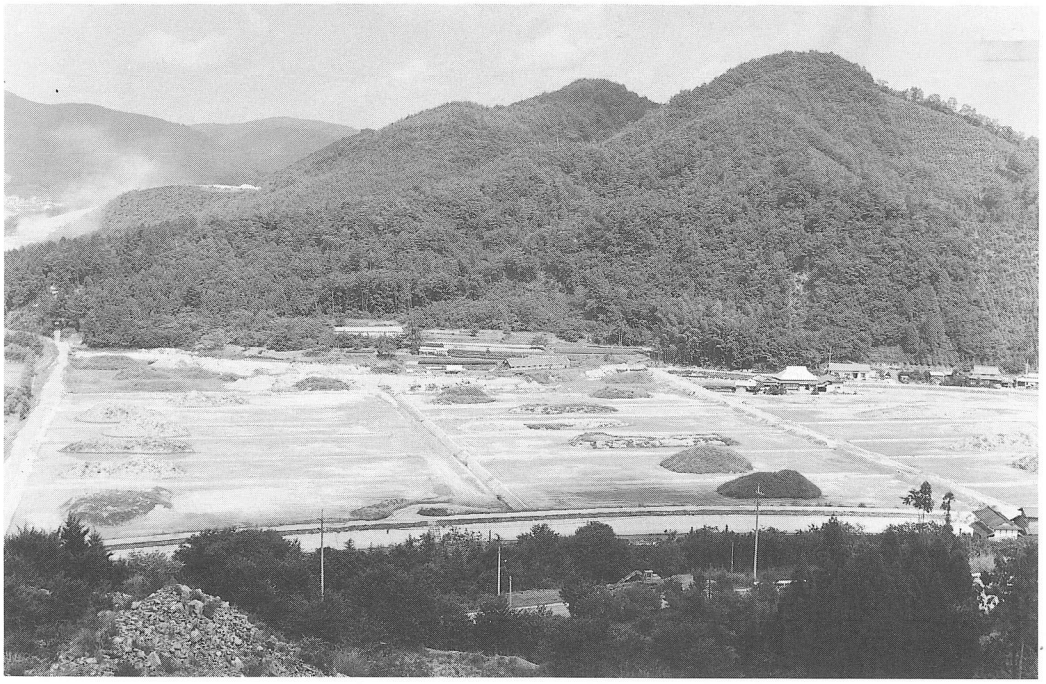
24	手捏ね土器				⎫	淡赤茶色 黄淡茶色	かみなり細砂混入	普通	B黒暗茶褐色
25	〃					白淡黄色 暗茶色（二次焼成）	水こし（砂っぽい）	〃	〃
26	〃				⎬ 内面指ナデ仕上げ，外面タタキ目 （製塩土器）		若干細砂混入	良好	〃
27	〃						わずかに細砂混入	普通	〃
28	〃						若干細砂混入	良好	〃
29	〃				⎭		〃	〃	〃
30	鉢形土器	23.0	6.2		内面指押えのちヘラミガキ・外面指押えの下半ハケナデ		若干砂粒（1㎜前後）細微砂を混入	〃	B包含層
31	小形丸底壺	9.3			内面胴部ヘラ削り・上部の内外横ナデ		若干細砂含む	普通	〃
32	〃	9.1			ハクリのため不明		多量の細微砂を混入	普通	〃
33	〃	8.1			内・外面上部ナデ・外面頸部より下はハケナデ		かなり細粗砂を含む （0.5㎜前後）	普通(上)	B（W）造成土
34	〃	7.5			内面胴部ヘラ削り・上部クシ目・外面ヘラ削り・下部ナデ		かなり粗砂粒を含む	〃	〃
35	杯（蓋）	13.5	3.0		内面ナデ・外面上部ヘラ削り，下部ナデ		かなりの細砂を混入	良（上）	B包含層
36	台付椀型土器	17.1	5.8	9.5	内外面共にナデ仕上げ		多量の微砂を混入した胎土	良好 （やゝ不）	暗赤褐色の顔料塗布しかし大部分が剥落している
37	皿形土器	14.15	1.4	11.6	内外ナデ，底部ヘラおこし		かなりの細砂粒を含む	良好	暗赤淡褐色化粧土残存（部分的）
38	?			6.0	?		多量の砂粒（0.5～2㎜）を混入	良好 （やゝ不）	B包含層
39	小皿	7.2	1.3	5.1	内外共にナデ		多量の細砂を含む	普通	B（W）造成土
40	〃	7.1	1.1	6	〃		〃	良	〃
41	壺形土器	17.0	30.8	5	内面胴部ヘラのちナデ（部分的にハケ目）・外胴部ヘラ押えのちナデ		かなりの細砂を混入	良好	B包含層
42	甕形土器	16.1	30.4		内面胴部下はヘラ削り・上部指押え・外面指押えのちナデ		多量の細微砂を含む	〃	B東端包含層
43	壺形土器	40.4							
44	甕形土器	16.0	26.3		内面ヘラ削り・外面頸部より下は若干荒いハケメ		多量の細粗砂を含む	良好 （中～下）	CSH01西側 pit
45	〃	13.5 (13.9)			内面ヘラ削り，ナデ，外面荒いハケ		かなり多量の砂粒（0.5～2㎜）を含む	良好	CSH01（W）pit内
46	〃	12.95			内面体部ハケナデ上げ，上部と外面体部のクシ目，外上部横ナデ		かなり粗砂粒を含む	〃	CSH01
47	〃	15.1			内外面ナデ，内面頸部下は指ナデ		かなりの細砂・粗砂を混入	良好(中)	〃

48	甕形土器	13.1	17.6	4.7	内面ヘラ削り，外面荒いハケナデ	茶淡褐色	かなりの小石（1～5㎜）を混入	良好	C（東）SH（？）
49	〃	11.3			内面体部ヘラ削り，外面クシ目	暗茶色（外） 暗黄淡茶色（内）	かなり粗砂を含む	〃	CSH01
50	高杯形土器	11.15	7.7	8.6	杯・脚内外ナデ,杯底部ヘラ削り	外底内は黒青暗灰色 皿内面底は灰暗青色	かなり粗砂を含む	〃	〃
51	手捏ね土器			3.7	内外共に指押えのちナデ，底部ヘラおこし	若干黄色味をおびた茶淡褐色を呈す	かなりの細砂を混入	〃	〃
52	高杯形土器	11.6			内外共にナデ（？）	白黄淡茶色	多量の粗砂粒を混入	〃	〃
53	杯（蓋）	12.4			内面ナデ，外面上部ヘラ削り，横ナデ	黒灰青色	極く若干粗砂粒を含む	〃	〃
54	〃	12.4			〃	暗青灰白色（外） 白灰暗青色（内）	極くわずか粗砂粒を含む	〃	〃
55	杯身	12.1			内面ナデ，外面底部ヘラ削り	黒青灰色	わずかに粗砂粒を含む	〃	〃
56	〃	10.8			〃	黒青灰色（外） 暗灰青色（内）	わずかの細砂を含む	〃	〃
57	〃	11.1	5.2		内外ナデ，外下半部ヘラ削り	青灰色	良好（きめ細かい粘土）	〃	〃
58	鉢形土器	12.8	7.5	6.0	内外共にナデのち上部ハケナデ，底部ヘラおこし	黒茶褐色（外） 暗茶淡褐色（内）	若干粗砂粒を含む	〃	C（E）SH01出土
59	高杯形土器	18.9	12.9	13.05	杯内外荒いハケナデ，脚内面ヘラ削り，外面ヘラ押えのちナデ	暗黄茶色	かなりの細砂を混入	〃	〃
60	鉢形土器	11.6	7.7		内底部指押えのちナで，ヘラ・ハケ状工具によるナデ，外面クシ状工具，上部はナデ	白淡黄色～黒茶褐色（部分的に黒色あり）黒色～黒灰色	かなりの量，粗砂粒（0.5～maxで3㎜位）を含む	〃	CSH01（w）pit内出土
61	小形甕形土器	7.9	8.4			黒茶褐色～暗茶淡褐色	かなりの細粗砂を混入	〃	CSH01 西側pit
62	手捏ね土器	4.6	5.5	3.0	内面指ナデ，外面指押え，底部ヘラ押え	暗黄茶色	かなりの細砂を混入（若干・粗砂も含む）	〃	CSH01
63	〃	5.55	3.7		内外面共に指押えのちナデ，外面の一部にタタキ目（？）	内面上半と外面上半は暗黄茶色・下は黒色	かなり砂粒（0.5㎜）を混入	〃	〃
64	〃	5.6	3.3	4.0		黄淡茶色～淡茶色	かなり細粗砂を含む	〃	
65	〃	7.0	6.1		内外面共に指押え，内面に荒いハケ目あり	約¾は黒色他は,暗黄茶色(外) 一部黒色他は暗茶色(内)	かなりの砂粒（0.5～1㎜）を混入	〃	〃
66	杯身	10.9	4.6		内面，外面上半ナデ，外面下半ヘラ削り	黒青灰色	若干細粗砂を含む（きめ細やかな胎土）	〃	CSH04
67	壺形土器	21.3			内面下半ヘラ削り，上半・外面上半ナデ，下半ナデのちクシ目	淡赤暗茶色or茶暗褐色	かなり粗細砂を含む	〃	
68	〃	10.0			内面体部ヘラ削り，上半ヘラ磨き，外面下半ハケメ・上半ナデ	淡茶褐色	かなりの小石(0.5～3㎜程度)	〃	
69	〃	14.0			内面体部ヘラ削り，上半ナデ，外面ナデ（ハケ）	淡黄茶色	粗砂粒を多量に含み細砂の多い粘土	良好(中)	
70	〃	10.2			内面ナデ仕上げ，外面ハケ状工具のナデ仕上げ	黒色，灰淡白色（外） 淡灰黒茶色（内）	水こし粘土にかなりの粗砂を含む	良好	
71	鉢形土器	15.3			内面頸部にヘラ削り，下半クシ目，内外の上部横ナデ，外面体部クシ目	黄淡茶色，茶淡褐色	かなりの量の粗砂粒を含む	〃	CSH05etc

72	高台付身			8.0	内外面共にナデ仕上げ	暗青灰色	かなりの細砂を含む	〃	〃
73	〃			6.8	内外面ナデ，外面下部及び底部はヘラ削り	白灰色 胎土：白淡灰色	白磁		C造成土（白磁）
74	杯身	11.8	4.6		内面・外面上半ナデ，外面下半ヘラ削り	黒・青暗灰色	かなりの細砂，若干の小石（0.5～2㎜）を混入	良好	C東（SH05？）
75	〃	10.8			ナデ仕上げ	暗青灰色（外） 暗青灰白色（内）	極く若干細砂を含む	〃	CSH05
76	〃				内外ナデ仕上げ，外面下半～底部ヘラ削り	黒青灰色	若干細粒を含む	〃	〃
77	高杯	15.5			内面ハケナデ，外面下部クシ状工具	白黄淡赤茶色	微砂の多い水こし粘土に若干の粗砂粒を含む	〃	〃
78	〃			20.0 (21.0)	内部上半ヘラ削り，下半ナデ，外部上半ヘラミガキ，下半ナデ	淡黄茶色	多少粗砂，小石（1～2㎜程度）を含む。水こし粘土	〃	〃
79	〃			10.0	ハクリのため不明，内部上半にシボリ痕あり	淡赤茶色（外） 淡赤暗茶色（内）	微砂の多い水こし粘土で粗砂を含む	〃	
80	甕形土器	31.7	26.4		内面底部ヘラミガキ，体の上部は荒いハケ，外面上部ハケナデ，体部クシ目	白淡黄茶色（化粧土）	かなりの細砂を含む胎土である	〃	化粧土のハクリの部分については淡赤茶色を呈す
81	小皿	12.25	2.8	7.0	内面ナデ仕上げで底部は指或いはヘラ押えのちナデ仕上げ，外面上半ナデ，下部ヘラ削り，底部ヘラおこしのちナデ仕上げ				C西
82	〃	11.4	3.1	4,8					〃
83	〃	11.0	2.7	7.0		黒色～黒灰淡黄白色			〃
84	〃	12.1	2.6	6.8					〃
85	〃	11.7	2.7	6.75		白淡黄茶色			〃
86	〃	10.9	3.2	5.9		白淡黄茶色			〃
87	〃	11.25	2.6	6.3		淡黄茶色，黒灰色			〃
88	〃	11.8	3.1	5.7		暗灰淡茶色			〃
89	〃	12.2	3.1	8.3					〃
90	〃	11.3	3.0	5.5					〃
91	〃	11.8	2.7	5.7					〃
92	〃	11.6	2.9	6.0		黒色～黒灰色 白淡茶色			〃 〃
93	〃	11.6	2.6	5.3					〃
94	〃	11.4	2.6	5.3					〃
95	〃	11.75	3.2	6.0		黒灰色 白黄淡茶色）半々			〃
96	〃	11.9	2.9	6.3					
97	〃	11.3	2.8	6.4					
98	〃	11.6	3.3	5.8					

99	壺形土器	12.9	17.2		内面体部～底部指押えのちナデ仕上げ，外面ハクリのため不明	暗茶色	小石（0.5～2㎜位）粗細砂をかなり混入（もろい）	普通(良下)	C（東）土器溜り
100	甕形土器	13.8	21.8		内面体部ヘラ削り，口縁ナデ，外面体部ハケナデ仕上げ，口縁横ナデ	暗黄茶褐色	多量の細粗砂を混入	良好(下)	〃
101	手捏ね土器	4.0	3.5		指押え	白淡黄色・黒色（少）茶褐色 ）外面	水こし粘土を使用	良好	C黒褐色土包含層
102	壺形土器	14.1			内面下部ヘラ削り，上部指押えのちナデ，外面下部クシ，上部ハケナデ	白淡黄茶色，一部黒色あり	かなりの細砂・微砂を混入	〃	C（東）包含層
103	杯身	12.6	4.7		内面・外面上半はナで，外面底部ヘラ削り	黒青暗灰色	ごく若干，小石（1～3㎜程度）を混入	〃	C造成土内出土
104	壺形土器	13.35			内面指押えのちナデ，外面ハケ目　輪積み	茶色～暗茶褐色（外）明茶淡褐色，淡茶色（内）	かなり細粗砂粒を混入	〃	
105	鉢形土器	11.3	7.1		内面下半指押え，内外上部横ナデ，外面下半指押えのちハケナデ	暗黄白茶色約¾が黒色（外）暗黄茶色（内）	若干の細砂を含む数個の（2～3㎜程度）も混入	〃	C（東）包含層
106	高杯形土器	15.0			ハクリのため不明	暗黄茶（淡）褐色	多量の細微砂を含む	普通	〃
107	〃	15.8			内面ナデ，外面上半ハケナデ，下半指押えのちナデ仕上げ	暗茶色～淡赤黄茶色	多量の細微砂を混入	良好	水こし粘土で細微砂の多い部分を使用しているもよう
108				13.2	内部ヘラ削り，外部ナデ仕上げ	暗黄茶色，赤暗茶色（外）赤暗茶色（内）	多量の微砂を含む	〃	C（東）包含層

図版 1

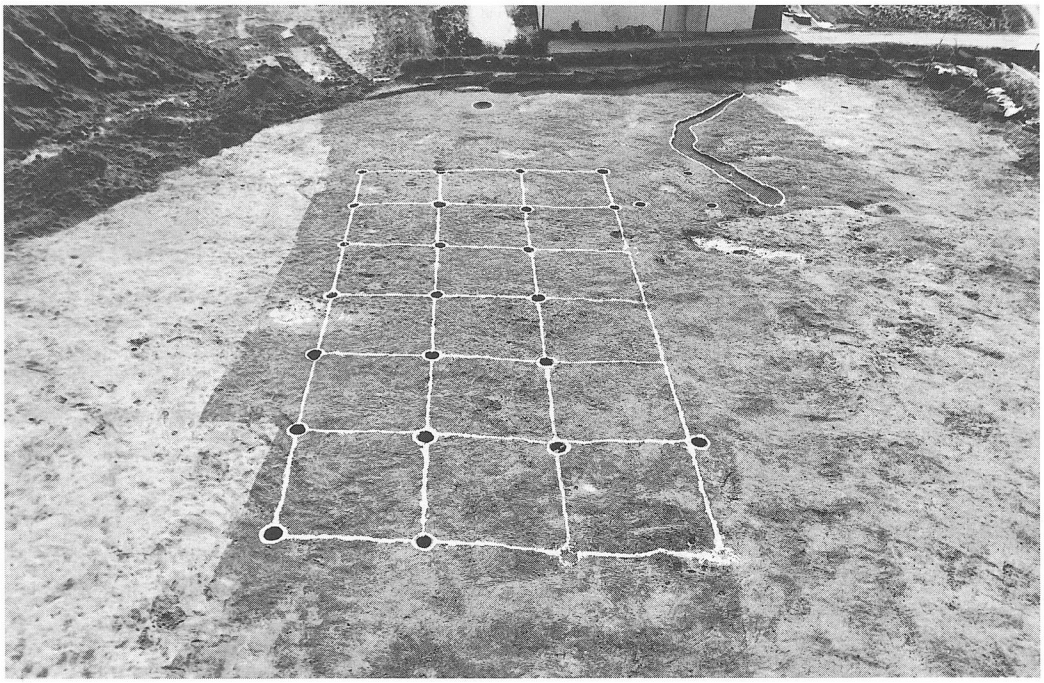


1．伊田沖遺跡全景（南南西から）

2．A地区建物・溝状遺構・合口甕棺墓検出状況（東から）

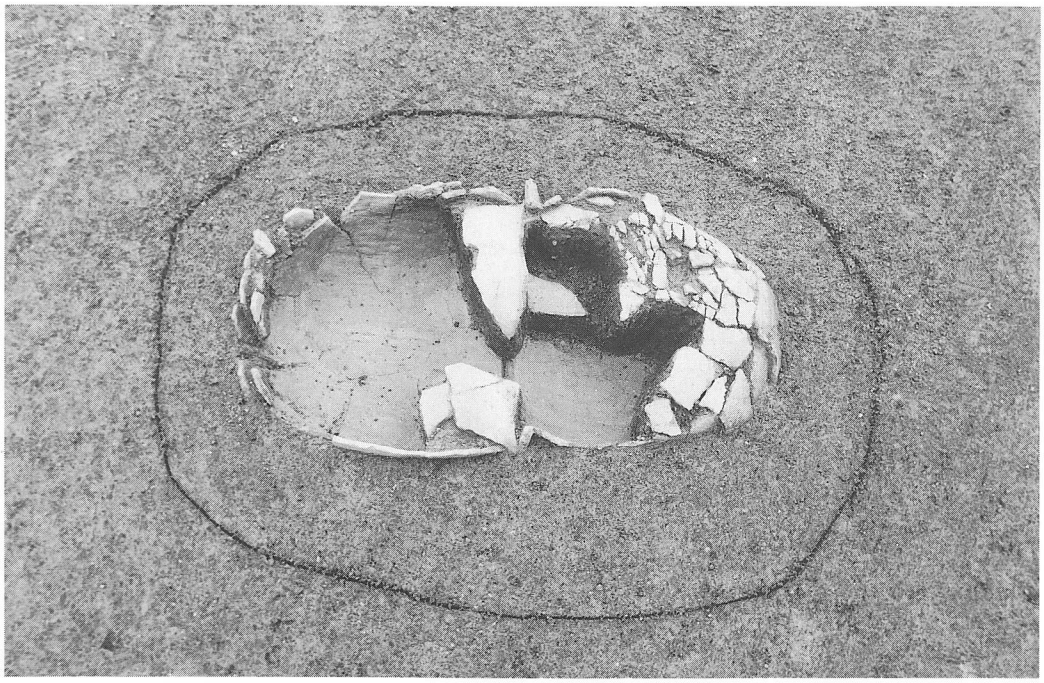
図版２

１．Ａ地区遺構全景（東から）



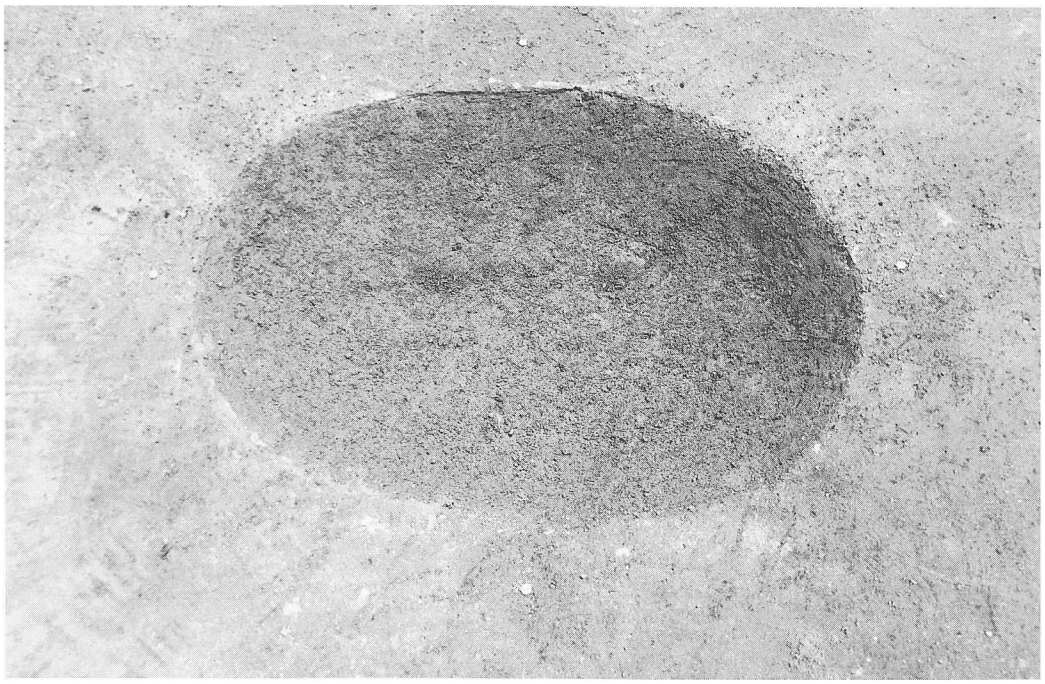
２．Ａ地区建物全景（東から）

1．A地区合口甕棺検出状況（南から）

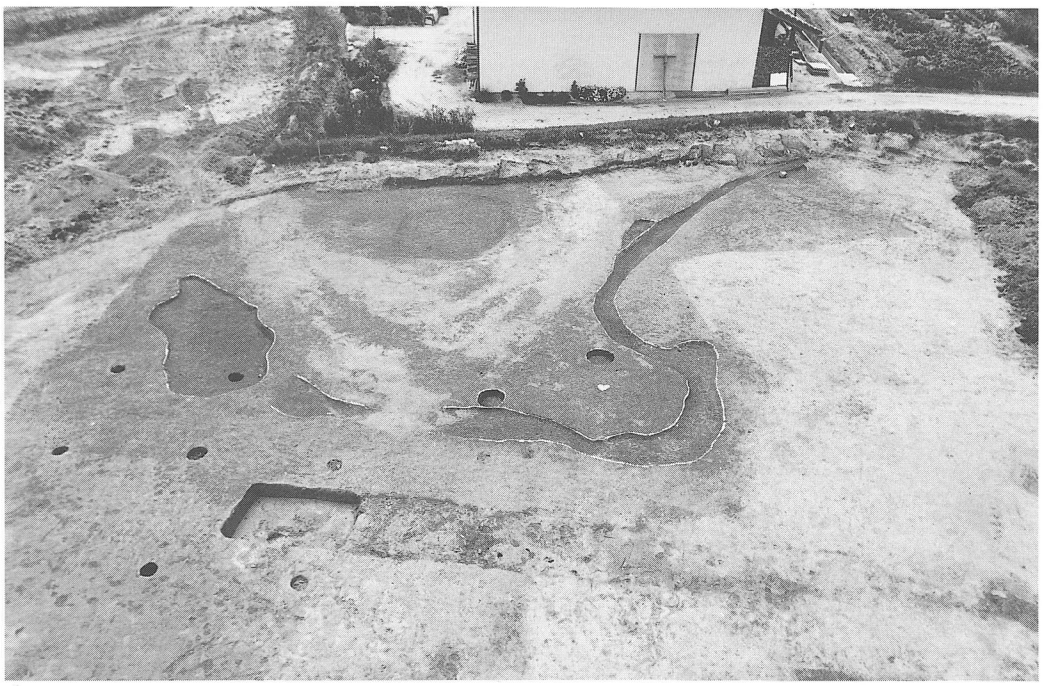


2．A地区合口甕棺内部掘り上げ状況（南から）

図版 4

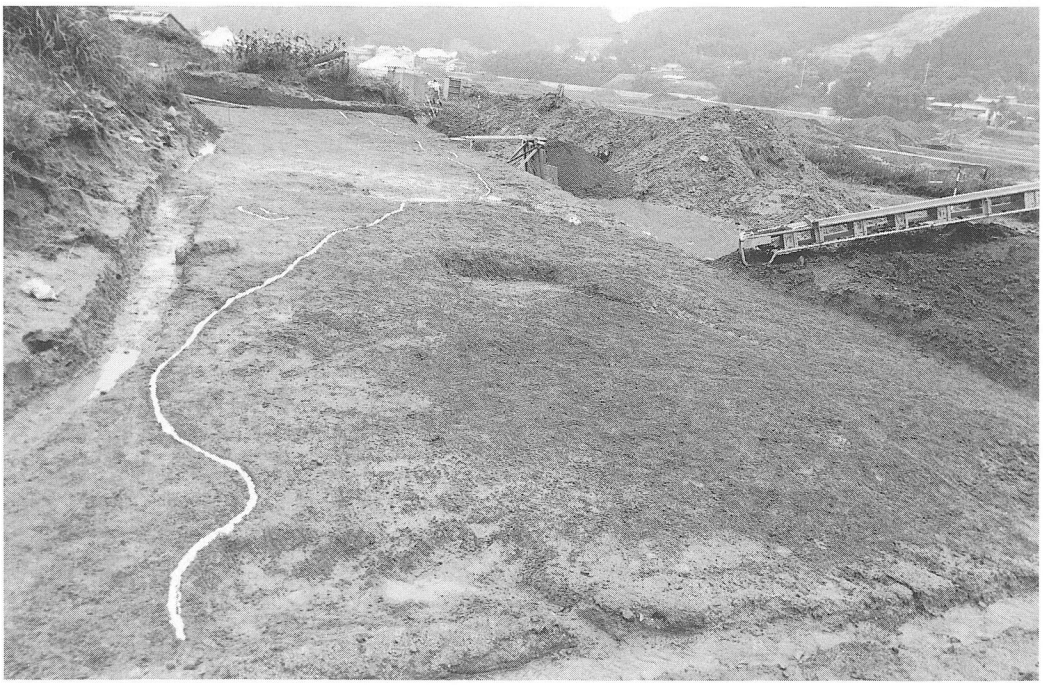


1．A地区合口甕棺埋納土壙（南から）

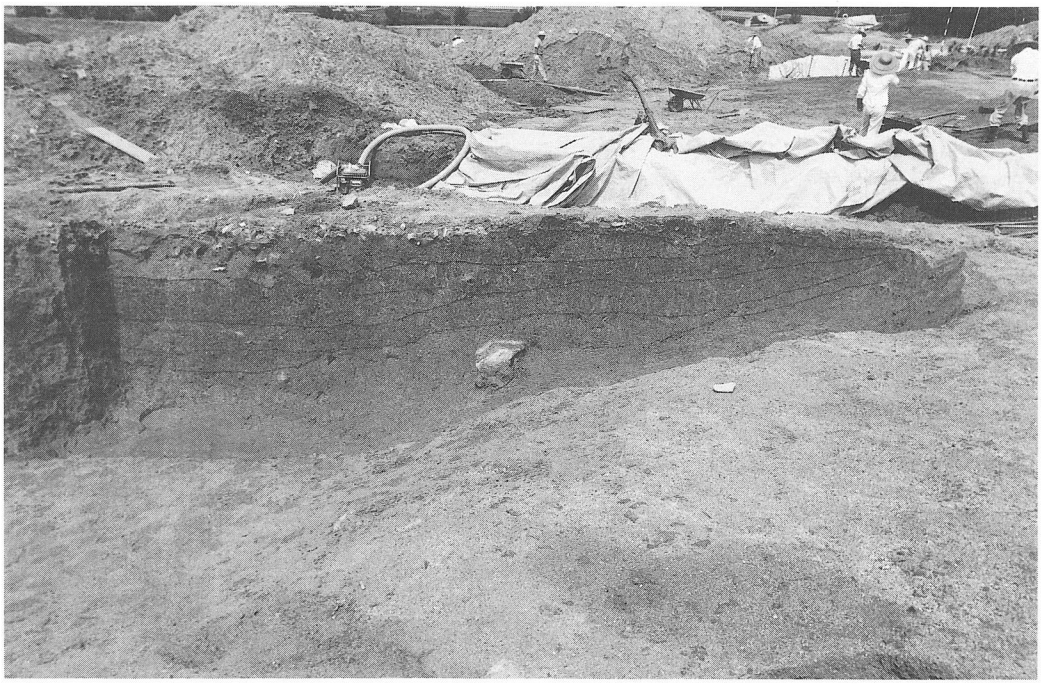


2．A地区下層遺構全景（東から）

図版 5



1．B地区東側全景（西から）



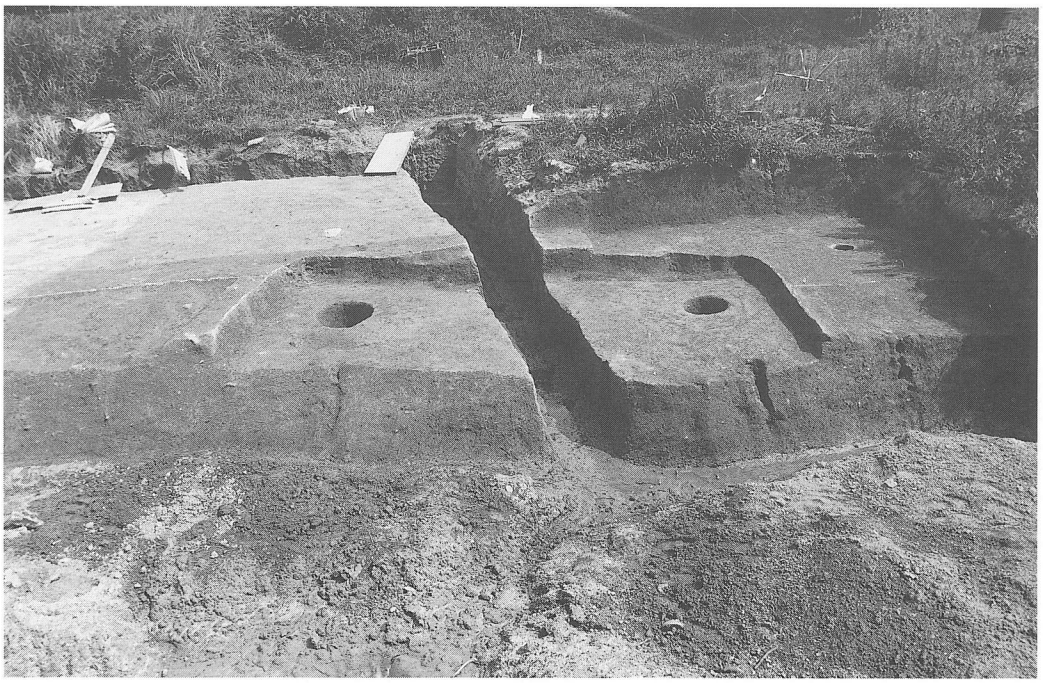
2．B地区東側南北土層断面（東から）

図版 6

1．B地区１号住居址南北土層断面（西から）

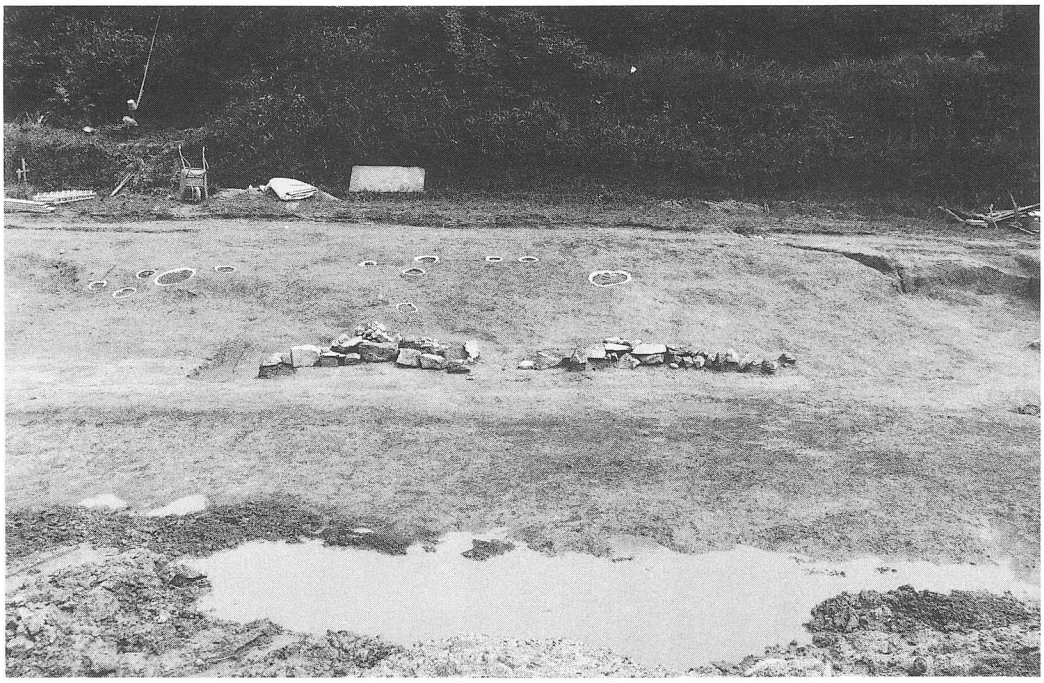
2．B地区１号住居址床面遺物検出状況（南から）

1．B地区１号住居址内出土遺物近影

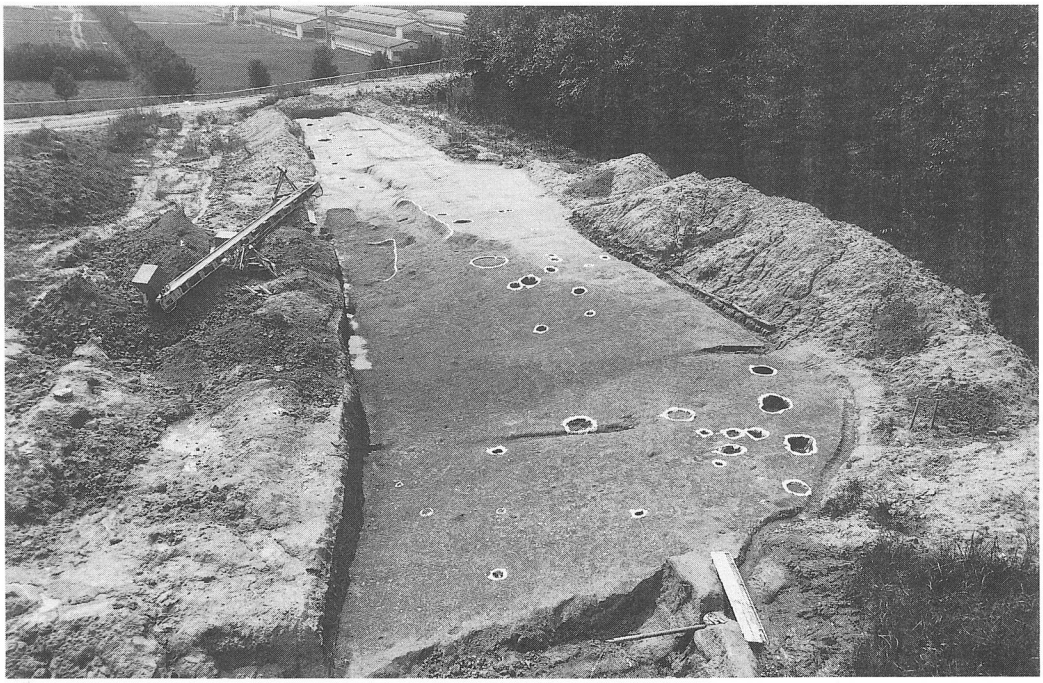


2．B地区１号住居址完掘全景（南から）

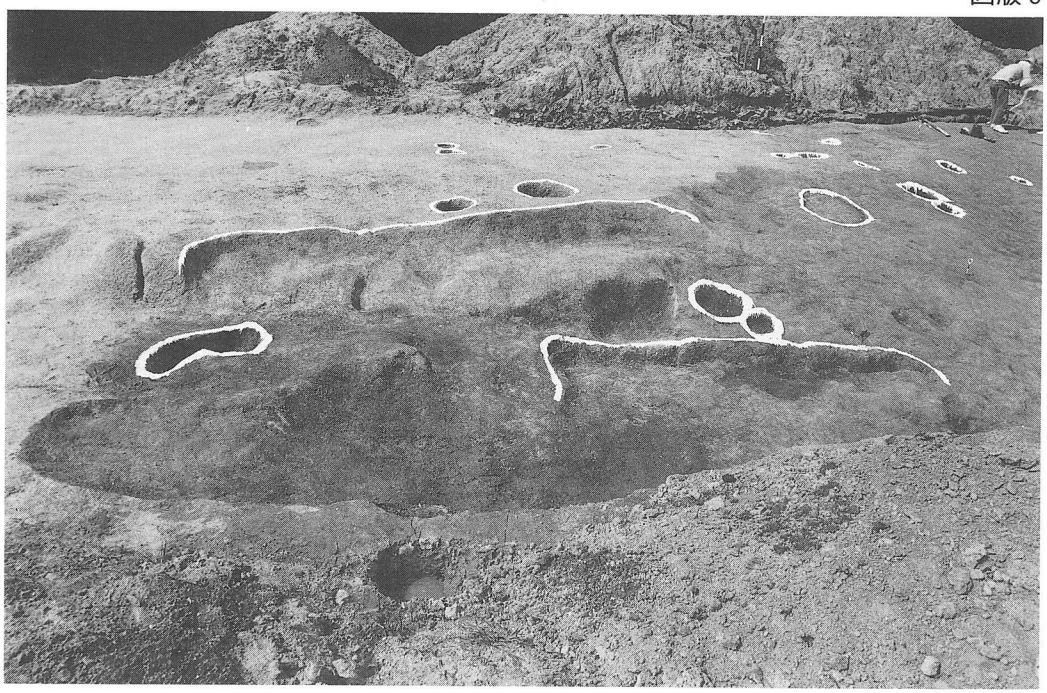
図版 8



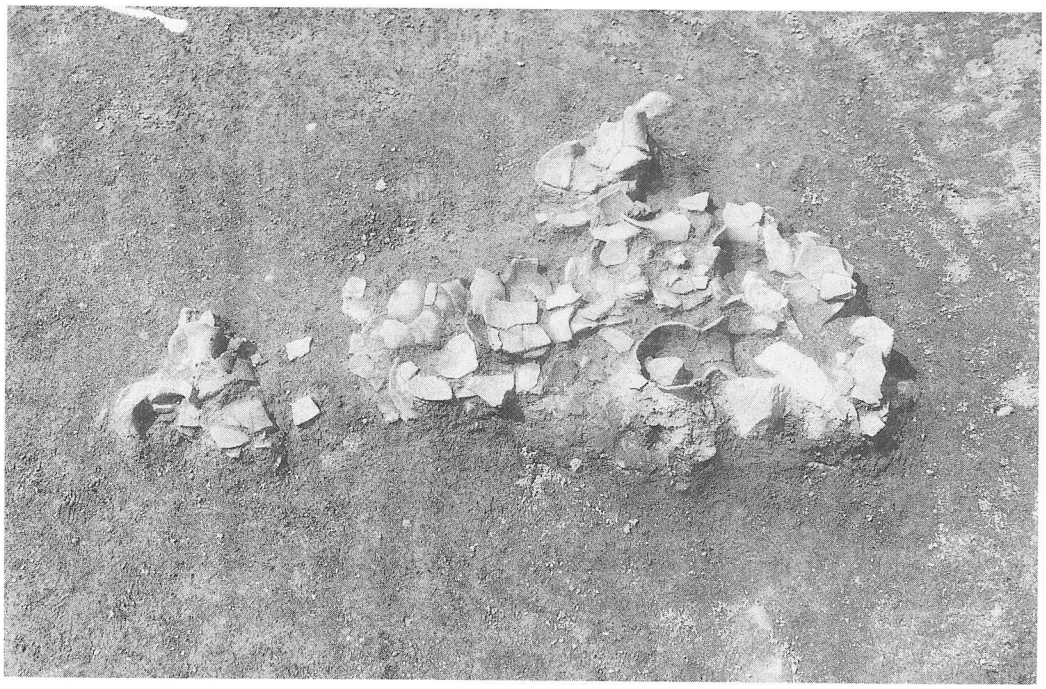
1．B地区中央部柱穴・石積遺構全景（南から）



2．B地区西側遺構全景（東から）



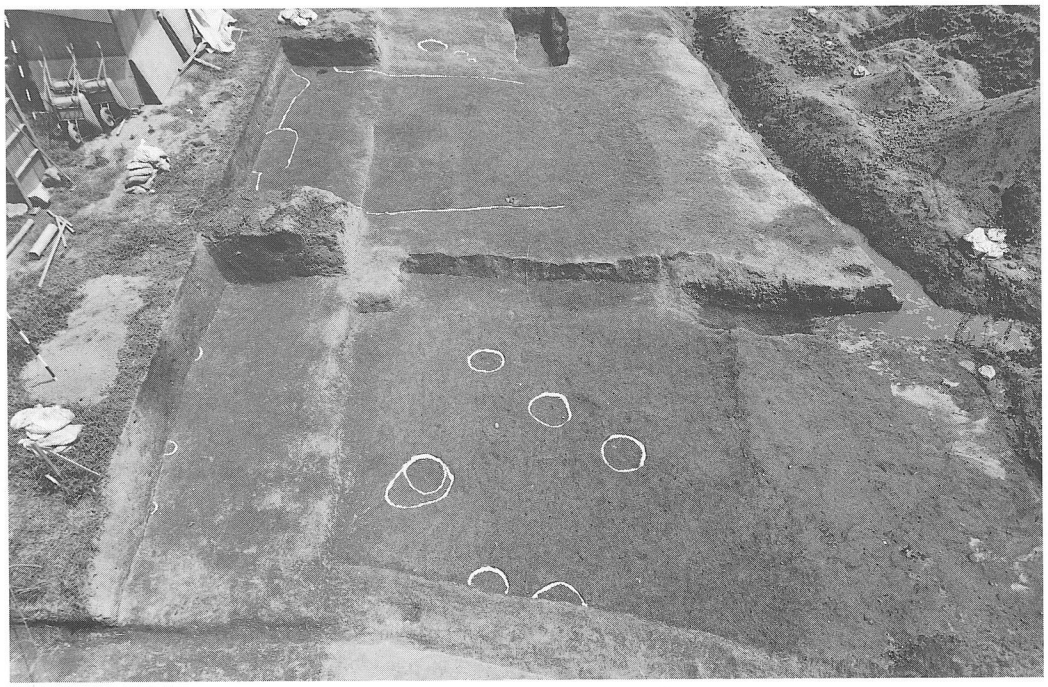
１．Ｂ地区２号（左上）・３号（右下）住居址完掘全景（南から）



２．Ｃ地区東端土器溜り近影（南から）

図版10

1．C地区３号住居址東側出土遺物近影（小皿納入甕）



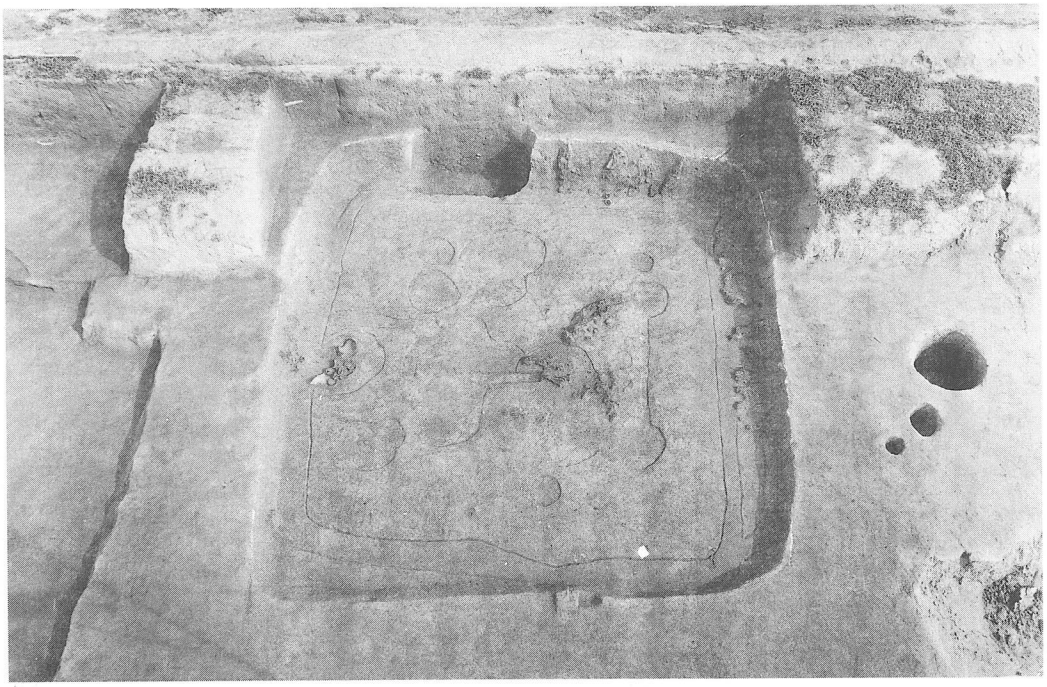
2．C地区１号（上）・２号（下）住居址検出状況（西から）

1．C地区１号住居址検出状況（西から）

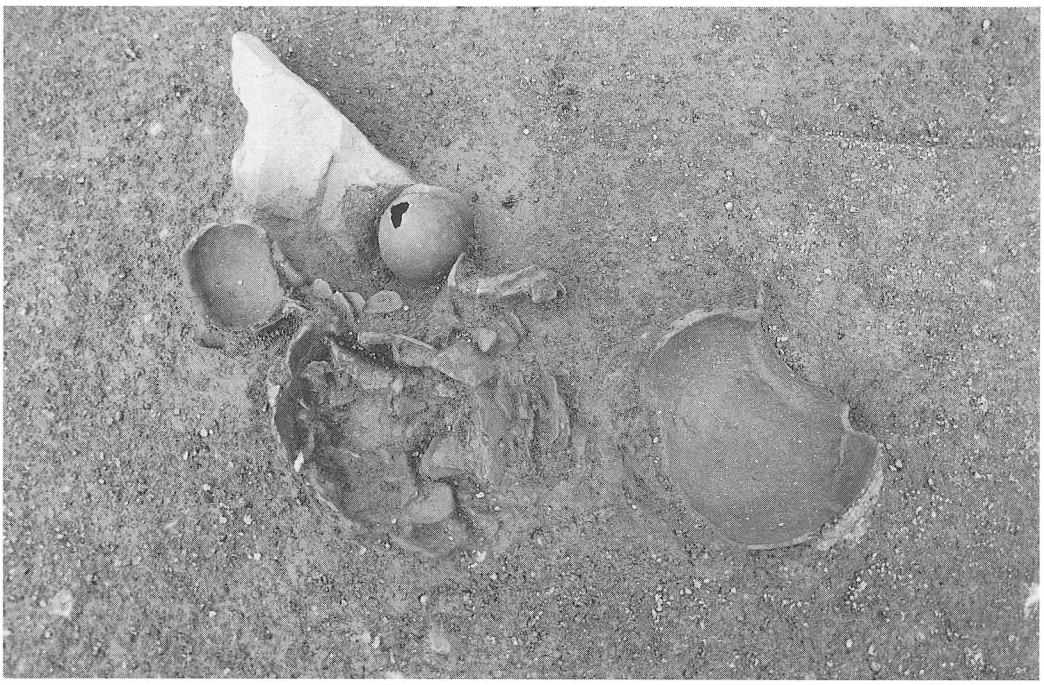
2．C地区１号住居址東西土層断面（西側）（南から）

図版12

1．C地区1号住居址南北土層断面（北側）（東から）



2．C地区1号住居址床面・炭化材・遺物検出状況（南から）

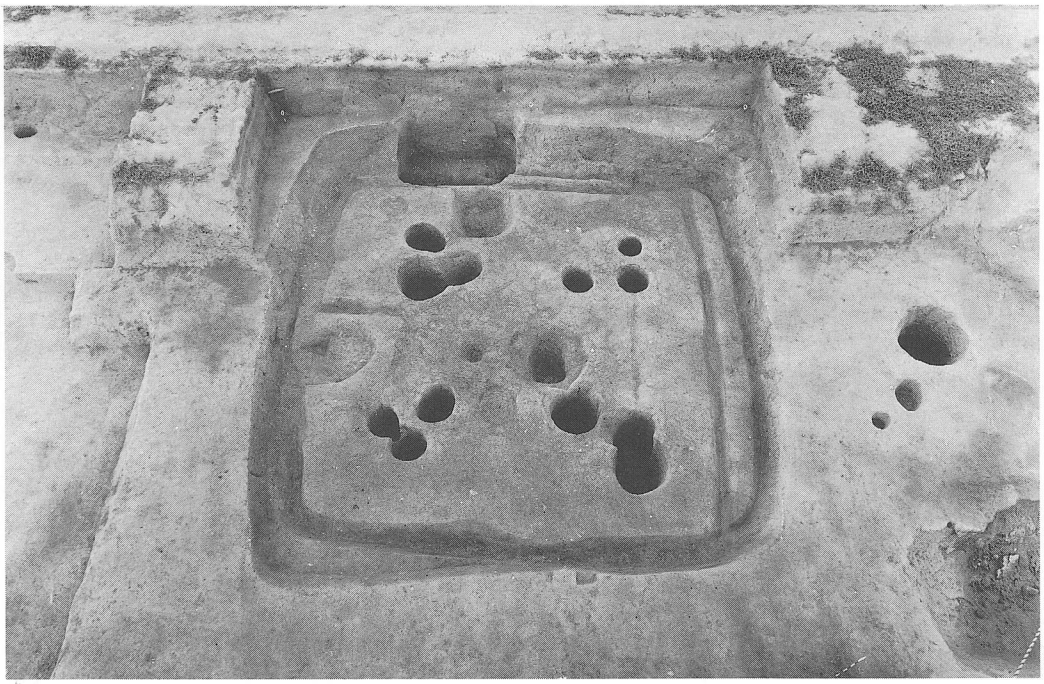


1．C地区1号住居址内遺物出土状況近影

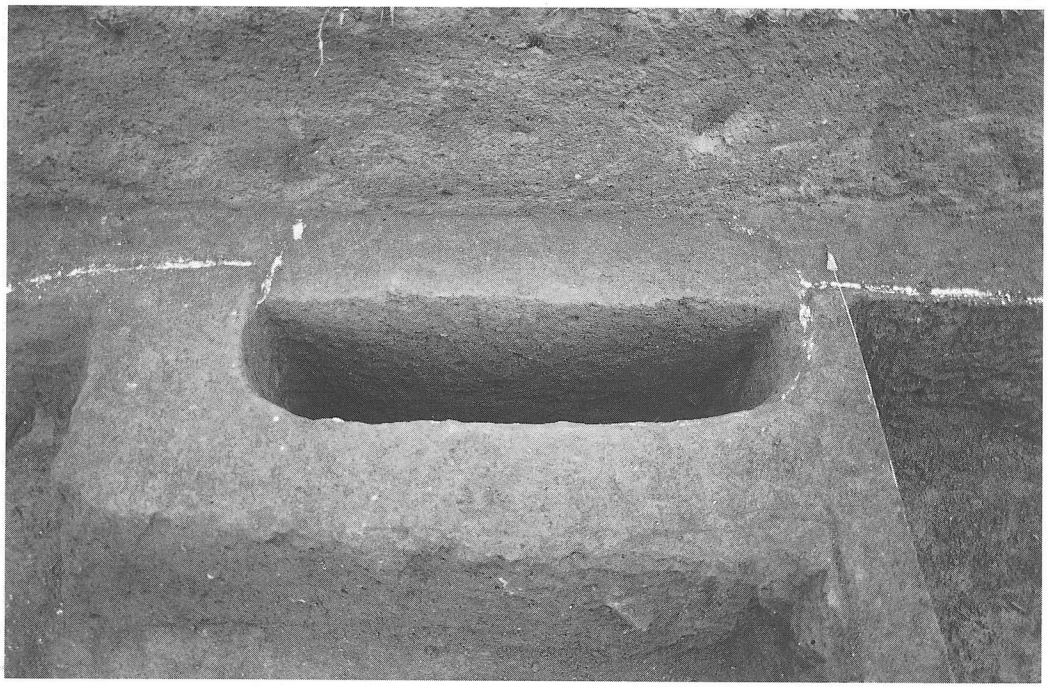
2．C地区1号住居址北壁・炭化材・遺物出土状況近影

図版14

1．C地区１号住居址炭化材除去後全景（南から）



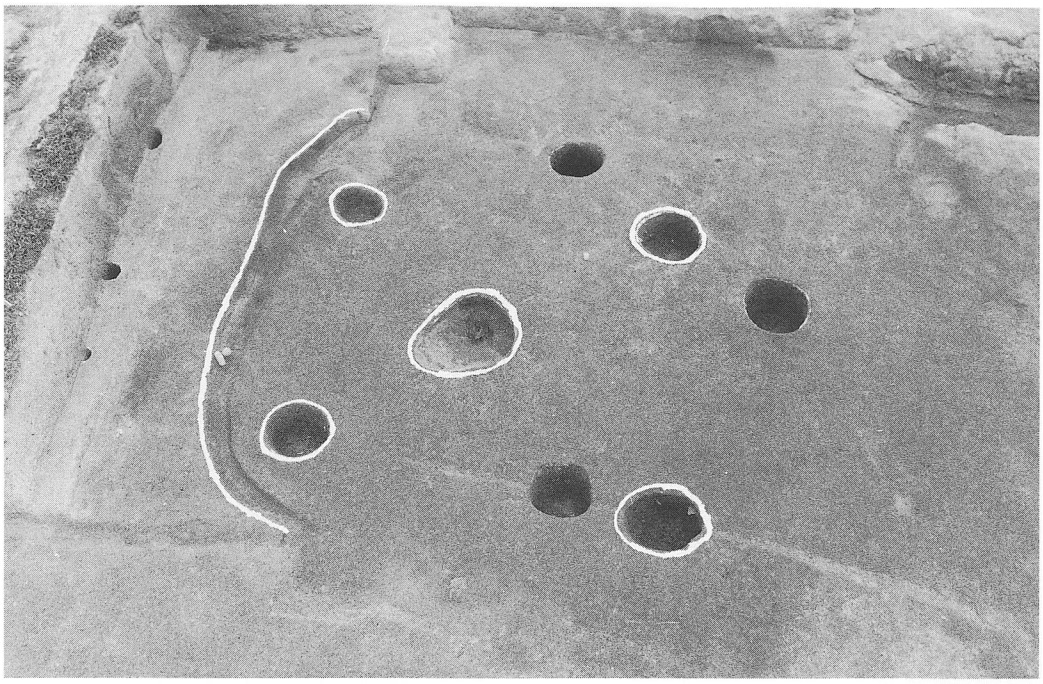
2．C地区１号住居址完掘全景（南から）



1．C地区1号住居址北壁検出土壙墓半掘状況（南から）

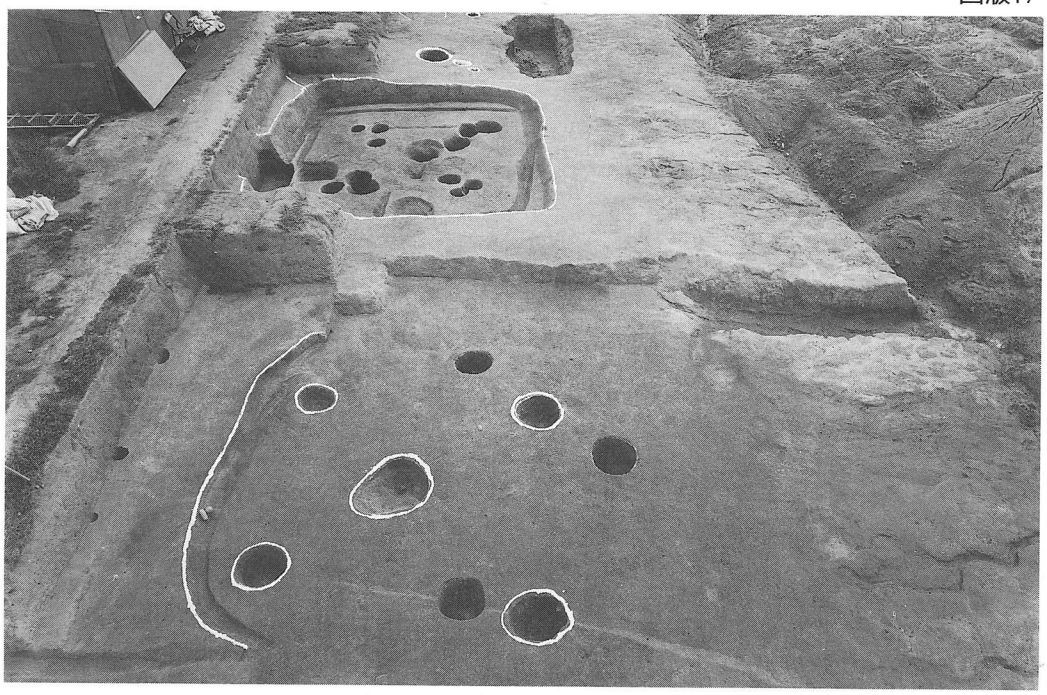
2．同土壙墓完掘状況（南から）

図版16



1．C地区２号住居址完掘状況（西から）

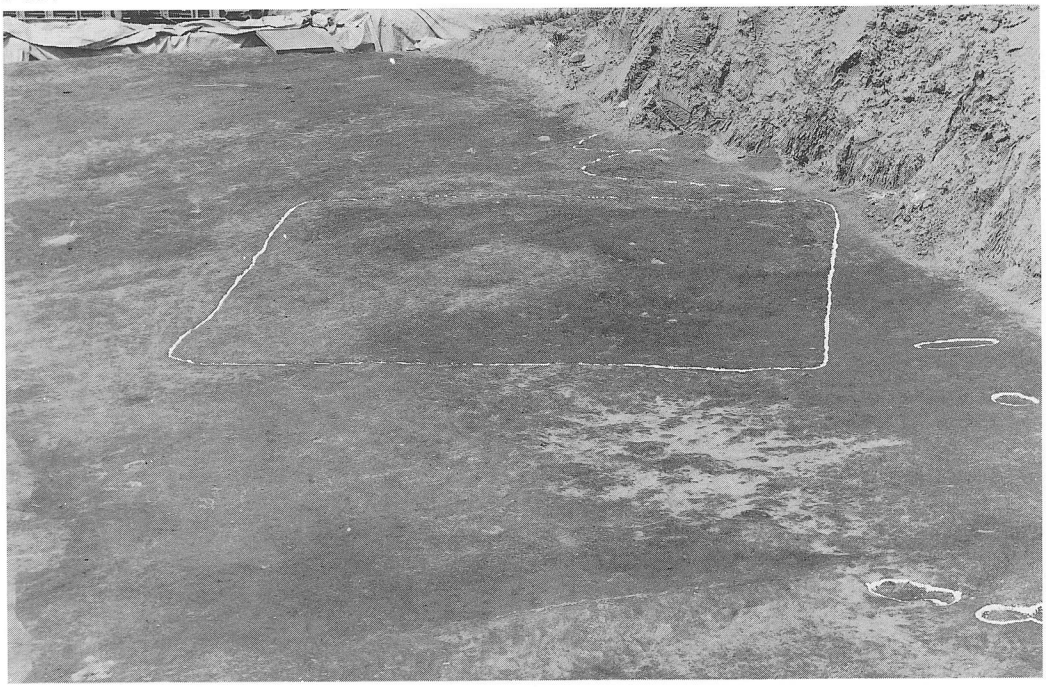
2．C地区２号住居址出土遺物近影



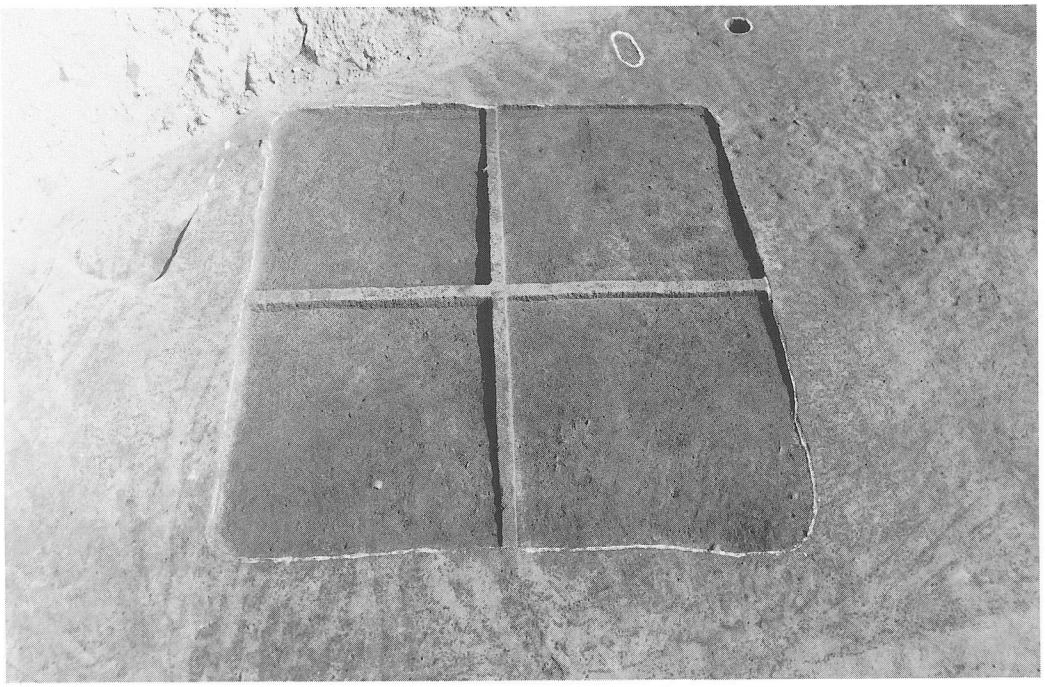
1．C地区1号（上）・2号（下）住居址完掘状況（西から）

2．C地区3号住居址（上）・土壙（中）・2号住居址（下）検出・半掘状況（東から）

図版18

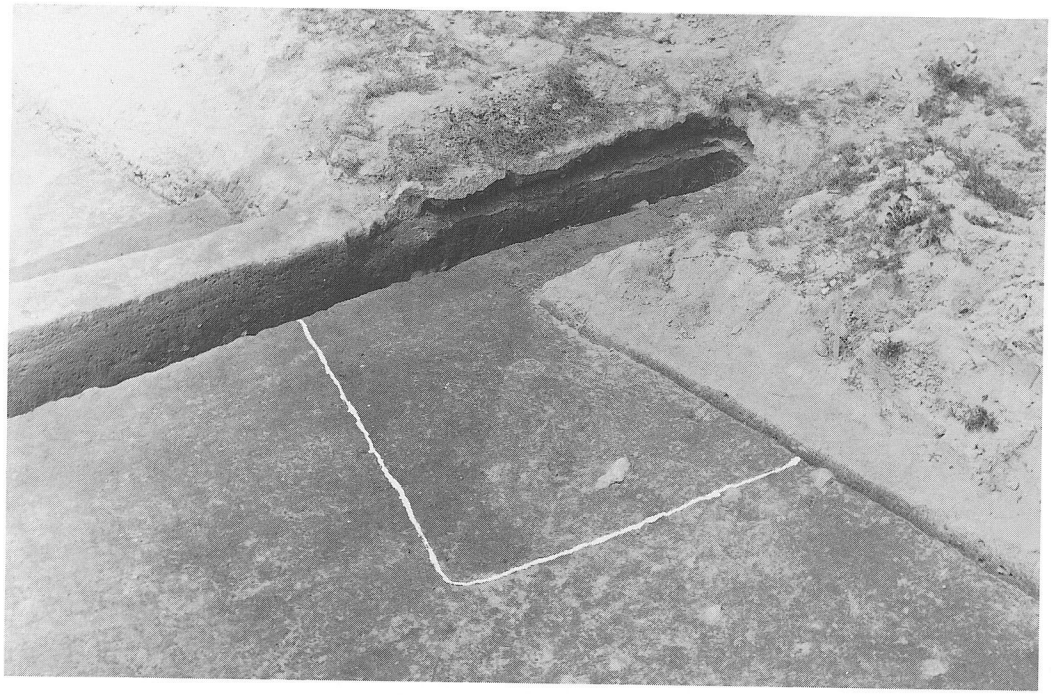


1．C地区３号住居址検出状況（東から）



2．C地区３号住居址掘り下げ状況（南西から）

1．C地区３号住居址完掘状況（南西から）



2．C地区４号住居址検出状況（南東から）